福岡市埋蔵文化財調査報告書　第301集

KUSA　BA

草場古墳群

—第３次調査報告書—

１９９２

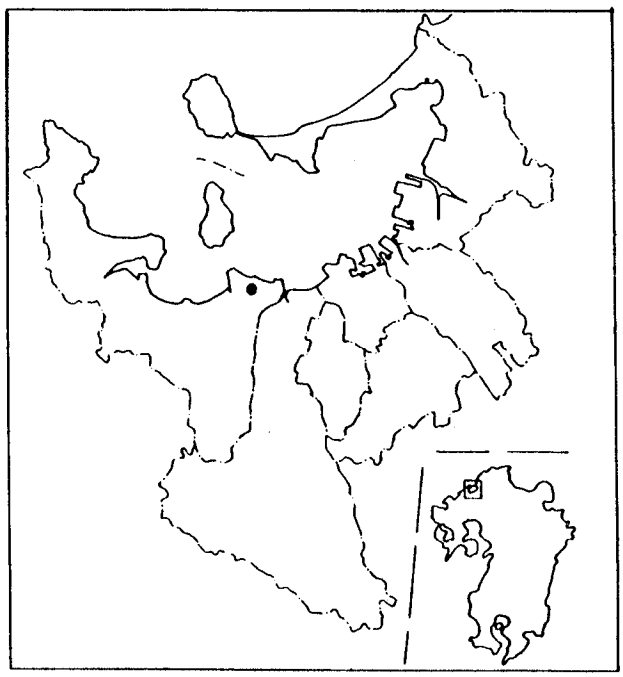
福岡市教育委員会

KUSA　BA

草場古墳群

—第３次調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第301集



１９９２

福岡市教育委員会

序

本市西区の叶岳から長垂山にいたる山稜の東側、早良平野を望む地帯は多くの小古墳が営なまれ、付近には平安京・大宰府鴻臚館の瓦を焼いた斜ヶ浦瓦窯跡、国史跡元寇防塁を擁する生の松原海岸、国指定天然記念物の含紅雲母ペグマタイト岩脈の長垂海岸があり、豊かな自然と史跡にかこまれた地域であります。

近年国道202号線バイパスの整備、都市高速鉄道開通にともなう筑肥線の高速化等の交通網の整備により、一帯の開発・宅地化が進んでおります。一方でこれにともなって消滅していく遺跡も多く、本市ではこれら開発によってやむなく失われる遺跡の記録保存調査を行なっております。本書もそうしたなかのひとつで、民間の宅地造成にともなって発掘調査を実施した草場古墳群の調査報告を収録したものであります。

調査の結果、12基の古墳時代後期の古墳をはじめ縄文時代から江戸時代にかけての重要な遺跡であることが確認されました。

通常、調査終了後は消滅してしまう遺跡がほとんどであるなか、今回は事業者のご理解・ご協力を得、このうち１・２次調査の行なわれた４基が保存され、将来史跡として整備する運びとなりましたことは調査とともに大きな収獲でありました。

調査に際しご協力をいただいた関係者各位、また地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝する次第であります。

平成４年１月10日
福岡市教育委員会
教育長　井口　雄哉

例　　言

1．本書は有明商事株式会社が実施した西区下山門字大谷1709番２外７筆の宅地造成にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成元年度に実施した草場古墳群第３次調査の調査報告書である。

2．本書で用いる方位は磁北で、真北はこれに６°21′東偏する。

3．調査区内のグリッド名称は10ｍ方眼線の西北交点とした。

4．遺構の呼称は略号化し、竪穴住居址→ＳＣ、土壙→ＳＫとした。

5．本書に使用した遺構実測図は柳沢一男・横山邦継・佐藤一郎・瀧本正志・加藤良彦・黒田和生・英豪之・溝口武司による。

6．本書に使用した遺物実測図は平川敬治・加藤良彦・木村厚子による。

7．製図は加藤・木村・撫養久美子による。

8．本書に用いた写真は加藤・平川による。

9．本書の執筆・編集は加藤が行った。

10．本書にかかわる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに…… 1
　1．調査に至る経緯…… 1
　2．調査の組織…… 2
Ⅱ．調査区の立地と環境…… 3
Ⅲ．調査の記録…… 6
　1．調査の概要…… 6
　2．縄文・弥生時代の遺物…… 8
　3．古墳時代の調査…… 9
　　5号墳…… 9
　　6号墳……14
　　7号墳……20
　　8号墳……27
　　9号墳……31
　　10号墳……36
　　11号墳……41
　　12号墳……45
　　竪穴住居址……49
　　土壙……51
　4．中・近世の調査……52
Ⅳ．小結……53

挿　図　目　次

Fig.1　周辺遺跡分布図（1/50000）…… 4
Fig.2　調査区位置図（1/2000）…… 5
Fig.3　調査区1区現況（西から）…… 6
Fig.4　調査区2区現況（東から）…… 6
Fig.5　第7トレンチ土層断面（南から）…… 7
Fig.6　2区拡張部現況（東から）…… 7
Fig.7　調査区雪景色（東から）…… 7
Fig.8　縄文・弥生時代遺物実測図（1/2・1/4）… 8
Fig.9　5号墳現況（西から）……10
Fig.10　5号墳検出状況（南から）……10
Fig.11　5号墳石室実測図・周溝土層図（1/60）…10
Fig.12　5号墳検出状況（東から）……11
Fig.13　5号墳石室検出状況（北から）……11
Fig.14　5号墳敷石検出状況（西から）……11
Fig.15　5号墳石室内遺物出土状況（西から）……11
Fig.16　5号墳石室完掘状況（東から）……11
Fig.17　5号墳周溝土層断面（北から）……12
Fig.18　5号墳周溝内遺物出土状況（北から）……12
Fig.19　5号墳石室内出土遺物……12
Fig.20　5号墳出土遺物実測図（1/4）……13
Fig.21　6号墳現況（西から）……14
Fig.22　6号墳検出状況（西から）……14
Fig.23　6号墳墳丘土層図・石室実測図(1/60)折込み
Fig.24　6号墳上面奥壁（西から）……15

Fig.25　6号墳下面奥壁（西から）……15
Fig.26　6号墳石室上部床面（西から）……15
Fig.27　6号墳石室下部床面（西から）……15
Fig.28　6号墳石室上面遺物出土状況（南西から）15
Fig.29　銅鈴出土状況（南から）……15
Fig.30　6号墳上面羨道（東から）……16
Fig.31　6号墳下面羨道（東から）……16
Fig.32　6号墳羨道閉塞状況（東から）……16
Fig.33　6号墳墳丘北側土層断面（北西から）……17
Fig.34　6号墳墳丘南側土層断面（南西から）……17
Fig.35　6号墳出土遺物実測図（1/2・1/4）……18
Fig.36　銅鈴44（1/2）……19
Fig.37　6号墳石室出土耳環・玉類……19
Fig.38　7・8・9号墳現況（東から）……20
Fig.39　7・8号墳検出状況（東から）……20
Fig.40　7号墳検出状況（東から）……20
Fig.41　7号墳2次墓道検出状況（南から）……21
Fig.42　7号墳2次墓道土層断面（南から）……21
Fig.43　7号墳石室検出状況（南から）……21
Fig.44　7号墳羨道閉塞状況（奥壁から）……22
Fig.45　7号墳墳丘内祭祀（南西から）……22
Fig.46　墳丘内祭祀遺物……22
Fig.47　7号墳東側墳丘土層断面（南から）……23
Fig.48　7号墳封土除去状況（南から）……23
Fig.49　7号墳1次墓道土層断面（南から）……23
Fig.50　7号墳墳丘内列石（南西から）……23
Fig.51　7号墳墳丘内祭祀下土層断面（南から）…23
Fig.52　7号墳石室裏込め石……23
Fig.53　7号墳石室掘方検出状況（東から）……24
Fig.54　7号墳石室掘方検出状況（南から）……24
Fig.55　7号墳羨道部側壁（東から）……24
Fig.56　7号墳腰石裏込め（北西から）……24
Fig.57　7号墳石室実測図・土層断面図(1/60)折込み
Fig.58　7号墳遺物実測図（1/4・1/6）……25
Fig.59　8号墳石室検出状況（東から）……27
Fig.60　8号墳全景（東から）……27
Fig.61　8号墳羨道部遺物出土状況（東から）……27
Fig.62　8号墳羨道部遺物出土状況（南から）……28
Fig.63　8号墳羨道部出土遺物……28
Fig.64　8号墳石室（北から）……28
Fig.65　8号墳墳丘南側土層断面（東から）……28
Fig.66　8号墳墳丘西側土層断面（南から）……28
Fig.67　8号墳実測図（1/60）……折込み
Fig.68　8号墳完掘状況（東から）……29
Fig.69　8号墳完掘状況（南西から）……29
Fig.70　8号墳遺物実測図（1/2・1/4）……30
Fig.71　9号墳全景（南東から）……31
Fig.72　9号墳全景（南西から）……31
Fig.73　9号墳墓道検出状況（南東から）……31
Fig.74　9号墳墓道遺物出土状況（南東から）……32
Fig.75　9号墳石室閉塞状況（南東から）……32
Fig.76　9号墳石室閉塞状況（北東から）……32
Fig.77　9号墳墳丘土層断面（南東から）……32
Fig.78　9号墳完掘状況（南東から）……32
Fig.79　9号墳完掘状況（南西から）……32
Fig.80　9号墳石室実測図・土層断面（1/60）折込み
Fig.81　9号墳遺物実測図（1/2・1/4・1/6）……34
Fig.82　10～12号墳全景（南東から）……36
Fig.83　10号墳検出状況（南西から）……36
Fig.84　10号墳検出状況（西から）……36
Fig.85　石室奥壁（南東から）……37
Fig.86　石室閉塞状況（奥壁から）……37
Fig.87　10号墳墓道遺物出土状況（南西から）……37
Fig.88　10号墳墓道出土遺物……37
Fig.89　10号墳墳丘内祭祀（南から）……37
Fig.90　10号墳墳丘内祭祀遺物……37
Fig.91　10号墳墳丘内周溝（南東から）……38
Fig.92　10号墳墳丘内周溝（南西から）……38
Fig.93　10号墳実測図（1/20・1/60）……折込み
Fig.94　10号墳出土遺物（1/4・1/6）……40
Fig.95　11号墳全景（南東から）……41
Fig.96　11号墳墓道土層断面（北西から）……41
Fig.97　11号墳石室閉塞状況（北から）……41
Fig.98　11号墳石室奥壁（北西から）……42
Fig.99　11号墳石室床面（北西から）……42
Fig.100　11号墳羨道部（南東から）……42
Fig.101　11号墳梱石上面線刻（南東から）……42
Fig.102　11号墳左側壁（南西から）……42
Fig.103　11号墳石室掘方（南から）……42
Fig.104　11号墳実測図（1/30・1/60）……折込み
Fig.105　11号墳出土遺物実測図（1/4・1/6）……43
Fig.106　12号墳石室検出状況（東から）……45
Fig.107　12号墳全景（東から）……45
Fig.108　12号墳全景（南から）……45
Fig.109　12号墳実測図……46
Fig.110　12号墳墓道土層断面（東から）……47
Fig.111　12号墳石室奥壁（東から）……47
Fig.112　12号墳石室全景（東から）……47
Fig.113　12号墳石室全景（南から）……47
Fig.114　12号墳遺物実測図（1/2・1/4）……48
Fig.115　SC－01実測図（1/60）……49
Fig.116　SC－01遺物実測図（1/4・1/6）……50
Fig.117　SC－02実測図（1/60）……50
Fig.118　SK－02実測図（1/20）……51
Fig.119　中・近世実測図（1/2・1/4）……52

Ⅰ　は　じ　め　に

1　調査に至る経緯

今回の調査は福岡市西区下山門字大谷で有明商事株式会社が計画した宅地造成にともなって実施された緊急発掘調査である。事業策定に当たって埋蔵文化財の有無の照会のため、同社から事前審査願いが埋蔵文化財課に提出された事により始まる。申請面積は17,029m²。受付番号は63－２－65である。

埋蔵文化財課で確認した所、草場古墳群の既存６基のうち３基が申請地内に劾当。これを受けて現地踏査を行ったところ、谷の西側の丘陵斜面で須恵器が散布しているのを確認した。このため昭和63年２月27日試掘調査を実施し、この箇所で新たに古墳２基の埋蔵を確認した。

同課では設計変更等での古墳の現況での保存が可能か申請者と協議を重ね、結果として隣接する本市学校管理地と申請地内の一部を換地することで、１～４号墳を現況保存、将来市史定史跡として整備する運びとなり、設計変更が不可能な５・６号墳と新たに確認された２基の計４基に対し、事前の発掘調査を実施する事となり、調査に関して同社と教育委員会とで委託契約が締結された。

発掘調査は平成元年（1989年）10月12日に着手、同年12月28日までの予定で実施されたが、谷の西側斜面及び陵線上で新たに４基の古墳の埋蔵が確認されたため12月28日終了は明らかに不可能であると判断された。このため同社と再協義を行い、同社の理解を得て期間・費用に関して変更契約がなされ、平成２年３月２日に全ての行程を終了した。

調査に際し、有明商事株式会社には多大な御理解と御協力を賜り、また三井建設株式会社には現場での種々の細かな配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

調査番号	８９５１	遺跡略号	ＫＳＫ－３
調査地地籍	西区下山門大谷1709－２外	分布地図番号	103－Ｂ－7
開発面積	17,029m²	調査実施面積	2,575m²
調査期間	891012～900303	事前審査番号	63－２－65

2　調査の組織

調査委託：有明商事株式会社

調査主体：福岡市教育委員会　　教育長　佐藤善郎（当時）

調査総括：埋蔵文化財課長　柳田純孝（当時）　埋蔵文化財課第２係長　柳沢一男（当時）

調査庶務：埋蔵文化財課第１係　松延好文（当時）

調査担当：埋蔵文化財課第２係　加藤良彦

調査協力：溝口武司　黒田和生　英豪之　瀬戸啓治　百武義隆　吉村哲美　井上紀世子
有富溢子　緒方マサヨ　後藤ミサヲ　平井和子　宮原邦江　山田サヨ子
吉岡田鶴子　柴田勝子　庄野崎ヒデ子　土斐崎初栄　藤崎久子　若狭睦代
池田初実　国武真理子　楢崎多佳子　能美須賀子　木村厚子　窪田慧　小城信子
西尾タツヨ　金子由利子　松井邦子　佐藤テル子　柴田常人　松尾キミ子
松尾鈴子　門司弘子　舎川春江　堀川ヒロ子　松井フユ子　坂口フミ子
清原ユリ子

資料整理：平川敬治（九州大学）　上方高弘　黒田和生　英豪之　溝口武司　池田初実
国武真理子　小城信子　木村厚子　窪田慧　楢崎多佳子　能美須賀子

II　調査区の立地と環境

本調査区は福岡市の都心部より西へ6km、博多湾岸より南へ0.5kmの地点、室見川が貫流する早良平野と高祖山麓・瑞梅寺川に限られた今宿平野とを東西に分かつ背振山系から飯盛山・叶岳・長垂山へとつらなる山塊から、早良平野へいくつも延びる海岸部に程近い標高19～28mの二つの小支丘上及び谷部に位置する。行政的には福岡市西区下山門に所在する。

周辺の歴史環境を概観してみると、旧石器・縄文早期の遺跡は山麓部と洪積台地に点在しており、羽根戸原遺跡・吉武遺跡群・有田遺跡群でナイフ型石器・細石器が、羽根戸遺跡・広石遺跡群名切谷遺跡・笠間谷古墳群で土壙・集石炉・押型文・条痕文・撚糸文土器・石槍・石鏃が検出されている。前期は沖積地の微高地上まで進出し、四箇遺跡群・湯納遺跡・田村遺跡で轟B式土器・曽畑式土器・竪穴・ドングリピット等が検出されている。中・後期では吉武遺跡群でドングリピット50数基、有田遺跡で貯蔵穴様ピット60数基、四箇遺跡群で埋甕・竪穴・竪穴住居址・特殊泥炭層（堅果類果皮の多量堆積－ヒョウタン・リョクトウ出土）が出土。晩期では突帯文の時期に増大し、有田七田前・十郎川・拾六町ツイジ・四箇・四箇東・田村遺跡などで大陸系磨製石器・木製農耕具未製品・矢板列・埋甕・竪穴住居址等が検出されている。

弥生時代前期前半は前代と重なって海岸部の中・低位段丘上に多く、有田遺跡には300×200mの大規模な環濠が出現し、藤崎遺跡では土壙墓群が見られる。前期後半からは内陸平野部にも集落が展開し、吉武遺跡群では「早良王墓」として賑わし、多数の青銅器を副葬した木棺・甕棺墓群とともに4×5間掘立柱建物が検出。中期にはさらに面的な広がりを見せ、内陸奥部にまで及ぶ。吉武遺跡群は拠点として更に発展し甕棺墓は1000基以上、墳丘墓も検出された。またこれに次ぐ集団として東入部遺跡群で甕棺130基中より細形銅剣1・銅釧10・素環頭刀子1・鉄矛1・鉄刀1・鉄剣1・鉇1を検出している。

弥生終末から古墳時代前期にかけては野方中原・野方塚原・野方勧進原・野方柳原・飯盛谷・広石遺跡群・宮ノ前C地点・重留・五島山・藤崎・西新町・有田遺跡で石棺墓・方形周溝墓・墳丘墓・住居址等が検出され、後漢鏡・三角縁鏡などが出土している。中期では吉武で円墳20数基・帆立貝式墳（樋渡古墳）・方墳（樋渡2号墳）・掘立柱建物・住居址多数が検出され、重留では70m級の前方後円墳（拝塚—重留1号墳）・方墳（重留2号墳）があり、梅林では27mの小型の前方後円墳を検出している。6世紀前半～中頃にかけ山麓部の羽根戸・羽根戸南古墳群で古墳群の造営が始まり、6世紀の後半以降金武・野方・広石・コノリ・高崎古墳群等金武から長垂山麓にかけにわかに増大する。鉄滓供献が見受けられるのも共通する。本古墳群もこのなかに位置する。広石遺跡群ではこの時期から7世紀代にかけ桁行4間以上の掘立柱9棟を含む26棟・竪穴住居址43戸の集落を検出している。

歴史時代では城の原廃寺・斜ヶ浦瓦窯址等がある。

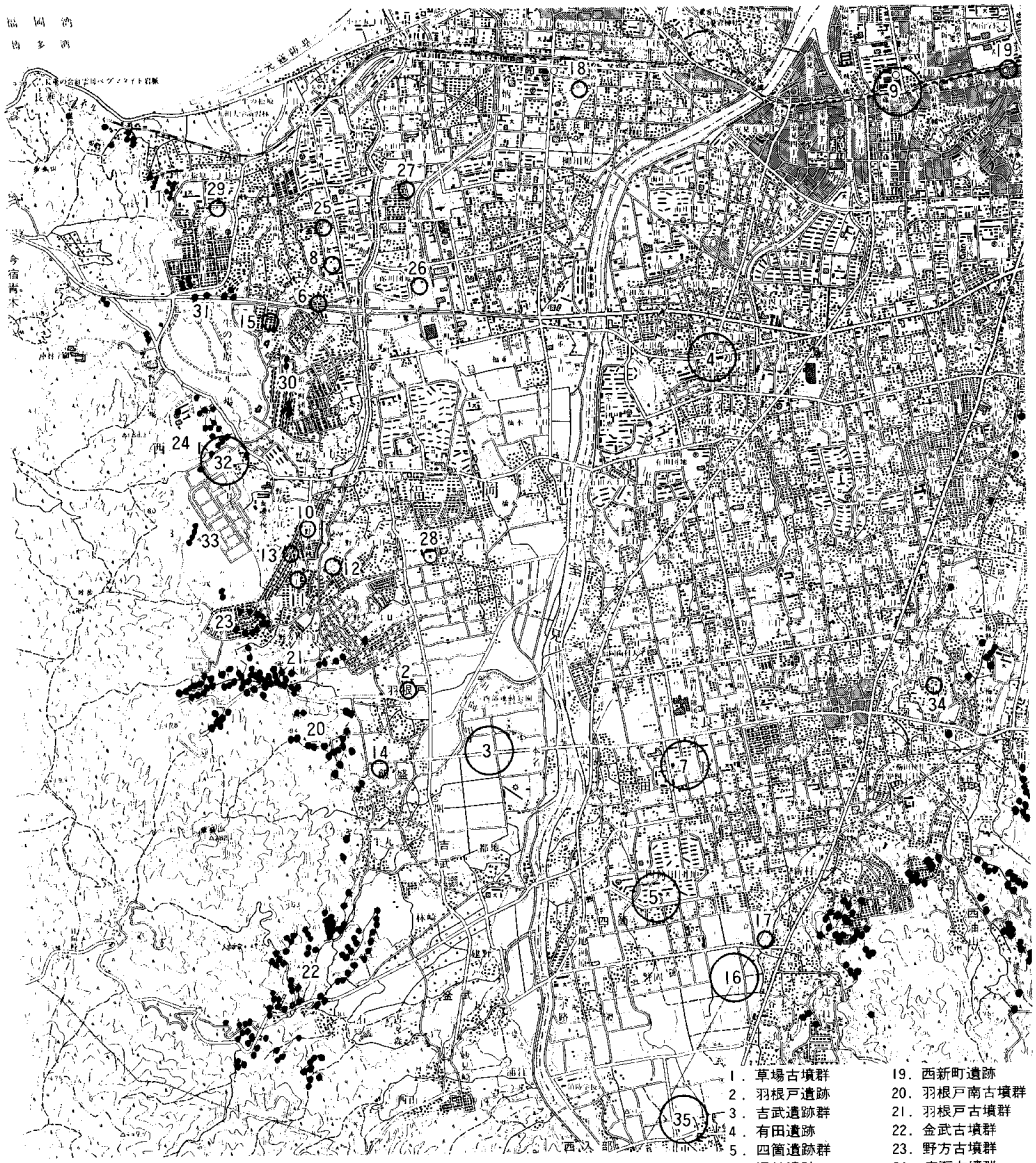


Fig. 1　　周辺遺跡分布図（1/50000）

1．草場古墳群
2．羽根戸遺跡
3．吉武遺跡群
4．有田遺跡
5．四箇遺跡群
6．湯納遺跡
7．田村遺跡群
8．拾六町ツイジ遺跡
9．藤崎遺跡群
10．野方中原遺跡
11．野方塚原遺跡
12．野方勧進原遺跡
13．野方柳原遺跡
14．飯盛谷遺跡
15．宮の前C地点
16．重留遺跡群
17．拝(灰)塚古墳
18．五島山古墳
19．西新町遺跡
20．羽根戸南古墳群
21．羽根戸古墳群
22．金武古墳群
23．野方古墳群
24．広石古墳群
25．城の原廃寺
26．石丸・古川遺跡
27．下山門敷町遺跡
28．牟多田遺跡
29．斜ヶ浦瓦窯跡
30．コノリ古墳群
31．高崎古墳群
32．広石遺跡群
33．笠間谷古墳群
34．梅林古墳
35．東入部遺跡

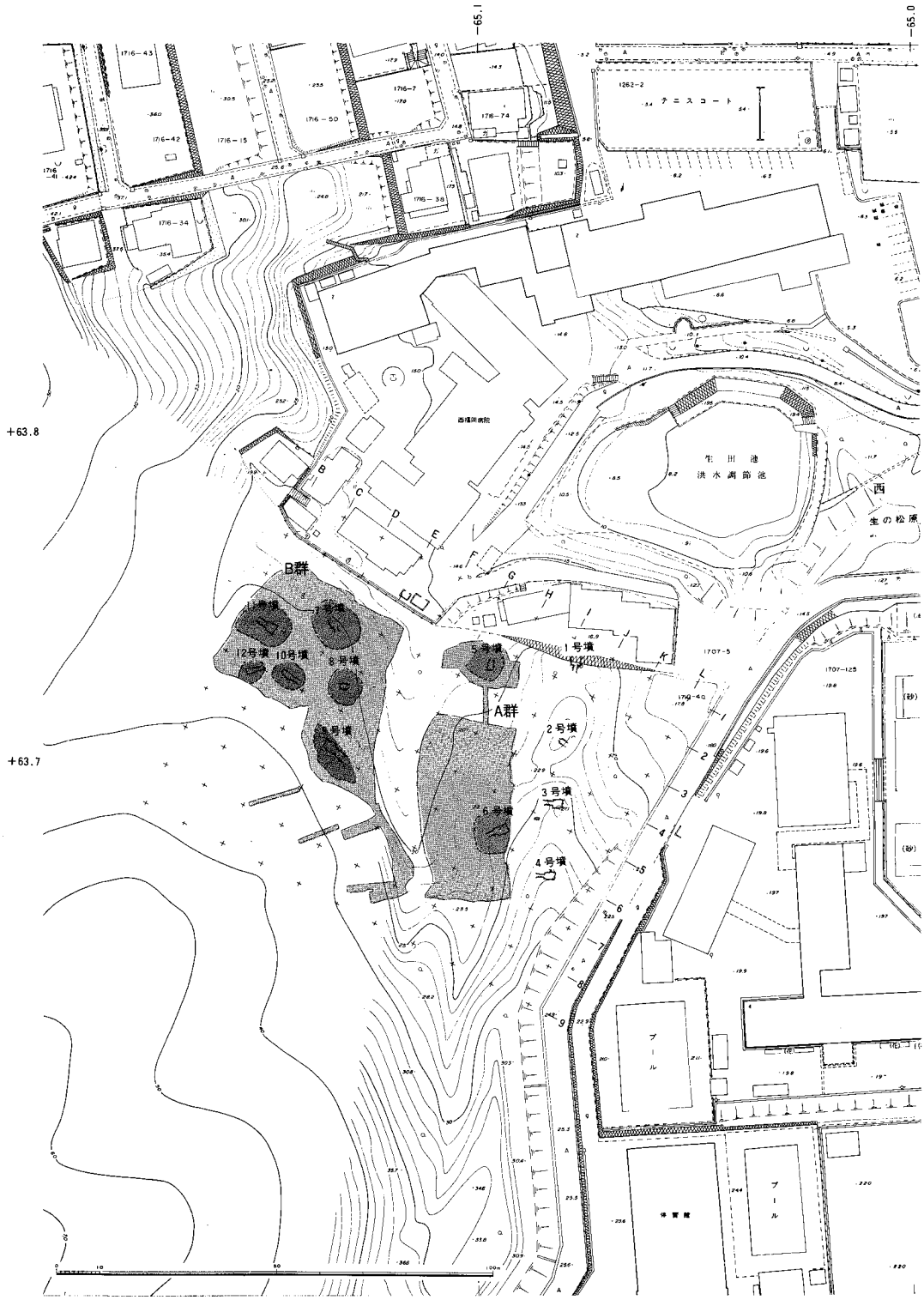


Fig. 2　調査区位置図（1/2000）

Ⅲ 調 査 の 記 録

1．調査の概要

本古墳群は長垂山（標高119ｍ）より派生する標高19～28ｍの小谷をはさんだ二つの低丘陵の陵線上と向き合った谷斜面に６基ずつ計12基が分布している（付図）。ここで東のグループをＡ群（１～６号墳・調査区１区）・西のグループをＢ群（７～12号墳・調査区２区）と仮称する。

このうちＡ群の１～４号墳は1972年に宅地造成の計画がなされた時、調査途中で計画が中断となり墳丘測量と４号墳のトレンチ調査のみが行われている（１次調査[註1]）。この後、1973年にも宅地造成の計画が持ち上がり、同年７月から９月にかけ１～４号墳の石室内の精査とトレンチ調査が行われている（第２次調査[註2]）。これも計画が中断され今回が３度目の造成策定であり、３度目の調査となり今回が本格的な調査実施となった。

Fig. 3　調査区Ⅰ区現況（西から）

Fig. 4　調査区２区現況（東から）

現況は山林で、東側丘陵の谷部斜面は戦後開墾がなされ中位段丘状の平担面をつくっている（Fig. 3）。このため５号墳は封土を削平、埋没していた。西側丘陵の谷斜面はこれと対称的に急斜面となっており、また標高30ｍ付近の斜面を戦後キャンプ場開設のため掘削して多量の土砂を谷部に押し出しており、９号墳はこの中に完全に埋没していた（Fig. 4）。さらに谷口の丘陵端部を開墾で平担にならしている。７～12号墳はこの際に破壊された様で、天井石を架構し、墳丘封土を残していたのは１～３・６・９号墳のみである。

基本層位は（付図、Fig. 5）表土下に50～150cm程の赤褐色混砂礫土の流土層が有り、これが谷の両側、30ｍの等高線あた

りまでを覆っている。大雨による土石流によるものと考えている。この下に20～30cmの黒灰色～黄灰色土の包含層が有り、明赤褐色媒乱土の再堆積層の基盤層となる。古墳の多くは基盤層と黄灰色土上に構築され、この黄灰色土は墳丘の最上面にも堆積している。

今回の調査対称となったものはA群の５～６号墳と試掘で確認した７・８号墳であった。立地が谷部であり、谷の開口部には西福岡病院が隣接している。このため谷の開口部には申請者が仮りの砂防壁を築いたが、調査による多量の排土を谷部に押し込んだ場合、これに耐える構造とも思われず、大雨時に土石流となって流出する危険性もはらんでいたため、５・６号墳と７・８号墳の２ブロックに分け、それぞれ排土を打て返しする段取りでまず７・８号墳から調査に取りかかった(表土掘削時に９号墳確認)。これと併行して７・８・９号墳西側の丘陵平担部に若干の高まりが有るためトレンチを掘削したところ新たに２基確認(10・11号墳)。このため、７・８・９号墳終了後に10・11号墳、その後５・６号墳へと３ブロックの工程に変更した。

調査を行った古墳は結果として５～12号墳の計８基で、５号墳が竪穴式の小石室を主体とする方墳・10・12号墳が片袖の単室横穴式石室を主体とする円墳である以外両袖の単室横穴式石室を主体とする円墳であった。時期は追葬を含め６世紀後半～７世紀末にわたる。

この他６世紀中頃の竪穴住居址１戸・時期不明の住居址１戸・土壙５基を検出した。

墳丘下の包含層中からは縄文早期の条痕文土器と石鏃・スクレーパーを若干検出した。

予想外の古墳の多さと調査期間中35日の雨天・降雪と期日に追われた調査であった（Fig. 7）。

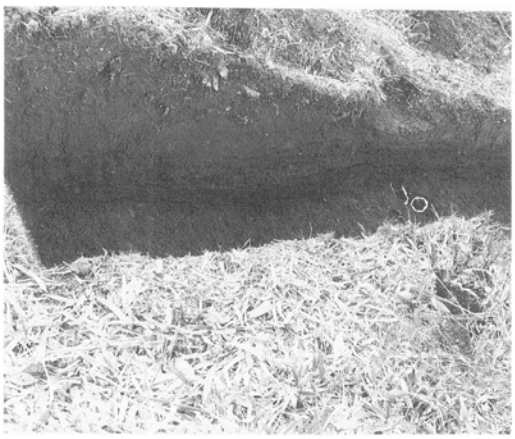


Fig 5　第７トレンチ土層断面（南から）

Fig. 6　２区拡張部現況（東から）

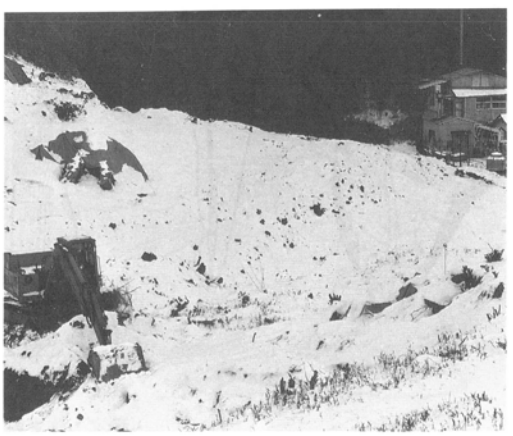


Fig. 7　調査区雪景色（東から）

2．縄文・弥生時代の遺物

墳丘下やＡ群・Ｂ群の段丘面の黄灰色包含層を中心に検出した（Fig. 8）。量は少量であるが弥生時代の遺物には完形品も有るため付近を精査したが遺構は検出されなかった。Ａ群の墳丘下に住居址等の遺構が有り、これからの流出とも考えられる。

１は黒耀石製の凹期の三角鏃で長さ24mm・幅16mm・厚５mmを測る。厚手の石鏃である。６号墳石室内床面間の床土より出土。２も同じく黒耀石製の鍬形鏃で左の脚と先端部を欠く。４も同じく黒耀石製の三角鏃で21.8×16.8×3.2mmを測る。横長の剥片を素材に用いる。9号墳下の包含層出土。3は古銅輝石安山岩製の鍬形鏃で14.2×13.1×2.4mmを測る小型の鏃で、主要剥離面の一部を残している。５は古銅輝石安山岩製の掻器で、自然面を残した打面からの一撃で剥ぎ取った角錐形の縄長剥片の先端部両側縁に主要剥離面側から二次調整がなされ刃部を形成している。６号墳墳丘上面からの出土。83×56×26mmを測る。他にＢ群下の包含層中から早期条痕文土器片を若干検出したが磨滅が著しく小片であるため図化に耐えない。

６はＡ群の流土中からの出土。縄文晩期浅鉢の肩部の小片で色調黒褐～淡褐色。外面の一部にケズリ様のヨコヘラナデが見られる。

７も同じくＢ群の流土中からの出土。弥生中期前半の広口壺の口縁部で口唇部に刻目を施す。８はＨ－５グリッド包含層からの出土。弥生中期初頭の甕の小片で磨滅が著しく調整不明。９は弥生後期後半代の器台で全周の¾が残存。底径13cm。くびれ部は上位にある。外面はタテ方

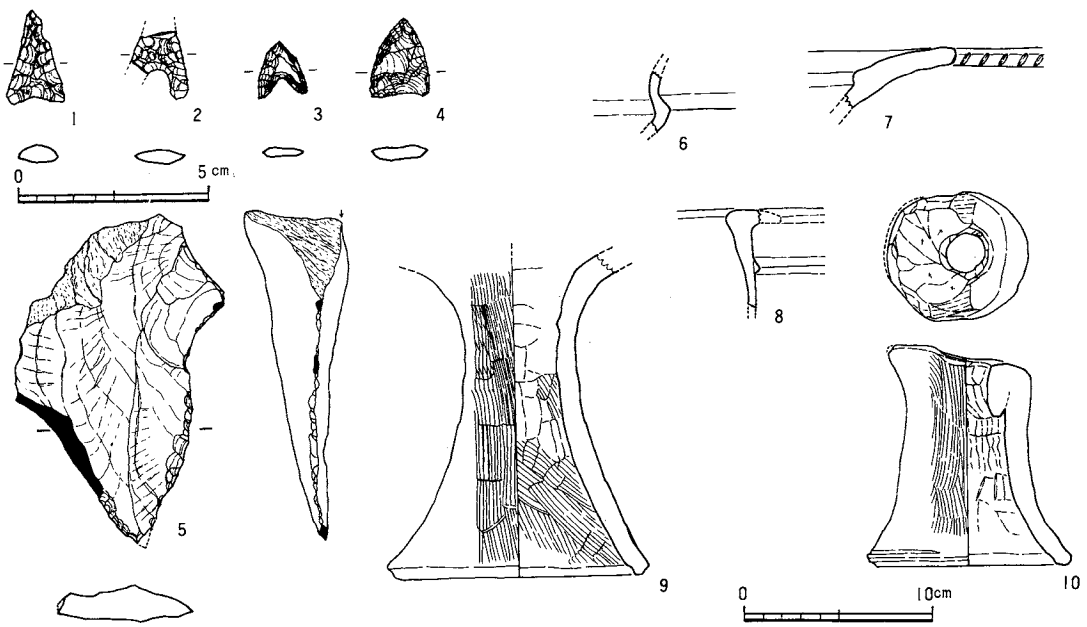


Fig. 8　縄文・弥生時代遺物実測図（1/2・1/4）

向のハケ調整・内面下半はナナメ方向のハケ、中位はハケ調整後ケズリ様のヨコナデ、上半は指頭圧後粗いタテナデが施される。10は弥生後期後半～末の支脚で口径7.6×6.8cm器高、底径11.4cmを測る。口縁部は整形時にその上端を内部に折り返して肥厚化し、その一方を嘴状に上面を広く上方につまみ上げる。さらにこの内面を右回転にヘラで押しナデて上方に端部を広げている。この部分は二次焼成を受け端部が欠落している。色調は暗褐色を呈し炭化物が付着する。他の部位は淡赤褐～淡黄褐色を呈している。外面はタテ方向のハケ調整、内面は下半がヨコ方向の板ナデ、中位にタテ方向に多数のシボリ痕が残り、上部はヨコ方向のヘラケズリ調整である。底・胴部の一部を欠く完形品である。

3．古墳時代の調査

今回の調査の主体をなすもので、谷部東側丘陵A群6基中の2基、5・6号墳と谷部西側丘陵のB群6基全ての調査と周辺遺構面で竪穴住居址2戸・土壙5基の調査を行った。

5号墳（Fig. 9～20）

5号墳は東丘陵裾の西側平担部、標高19mのあたり、G－18グリッドに位置する竪穴式の小石室を主体とする方墳である。昭和54年3月現在の遺跡分布地図では3号墳の北西側に位置しているが、この地点には古墳の痕跡は全く確認できず、南北方向のトレンチを設定・掘削した結果1号墳の西側で確認された。土層観察によると、赤褐色土の流土下からの検出であり、近世以降大戦後の開墾以前に削平されたものである。昭和47年の調査時では現6号墳が5号墳となっており、この位置の古墳は確認されていない。どの段階で古墳を認定したのか定かでないが、調査後もこの位置には古墳の痕跡も確認できなかった。検出順で番号をふるとこれが13号墳に相当するが、調査結果として昭和54年時の5号墳の存在は確認できないため、これは造成等の盛土の誤認と判断し、番号の混乱を避けるため、これを新たに5号墳とした。

現況は全くの更地で表面からの認定は全く不可能な程削平されている（Fig. 9）。墳丘盛土は残っておらず、周溝の底部と石室の壁が50cm程残るのみである。構築時の地山整形面も残っていない。

石室は南側幅2.6m・北側幅2.0m・長さ3.7mの隅丸台形状の掘方に南側に20～50cm程の小石3石で幅1.15m、北側は中央の石を抜き取られているが5～6石で1.3m東側壁は7石で2.25m・西側壁は7石で2.45mの石室を構築しており、これを腰石として上に10～30cm程の小礫を小口に積んで壁とする竪穴式の小石室を主体部としている（Fig.11・12）。主軸は方位をN－18°30′－Eにとる。石材は花崗岩・玄武岩と種々用いている。床面には5～20cm程の亜角礫を敷いているが、中央部の二箇所は撹乱により抜き取られている（Fig.14）。石室検出時には内部に壁体の小礫が多数落とし込まれた様な状態になっており、石室内の遺物は若干原位置から動いている様である（Fig.13）。

Fig. 9　　5号墳現況（西から）

Fig. 10　　5号墳検出状況（南から）

周溝は溝外径で南北8.5m、西端が撹乱で欠損するが東西の残存長で9.0mを測る若干いびつな方形を呈している。主体部はこの中央より東に片寄っている。溝は幅0.6～1.6mで深さ20cm程の浅いU字形を呈している（Fig.11・17）。溝底は東から西の谷方向へ下がっている。覆土は

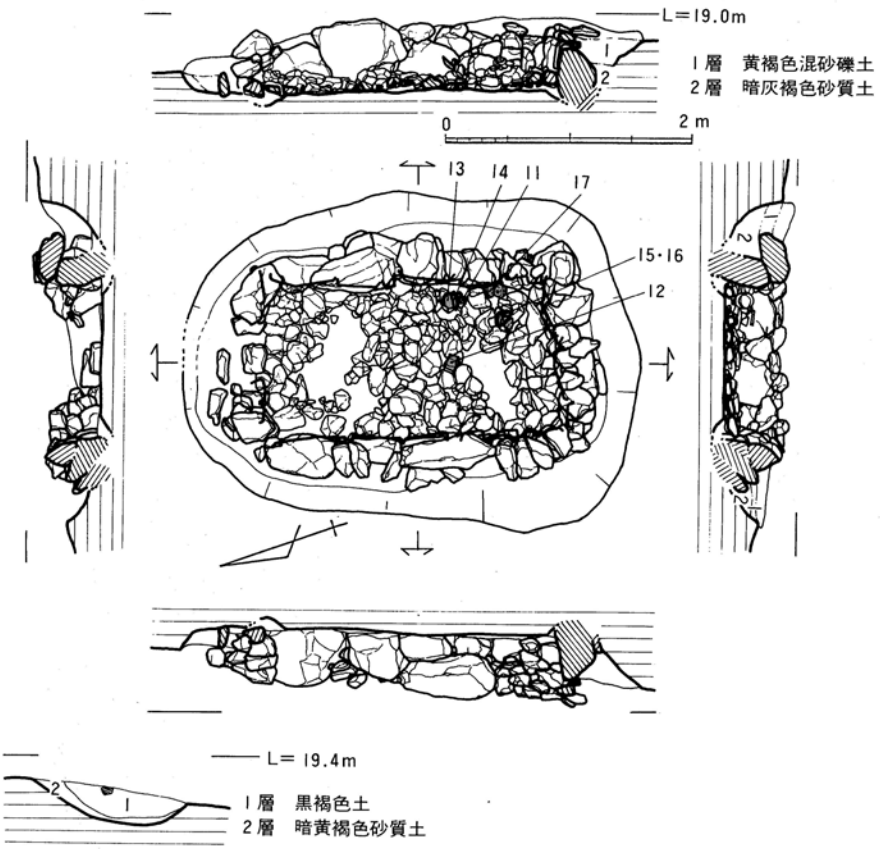


Fig. 11　　5号墳石室実測図・周溝土層図（1/60）

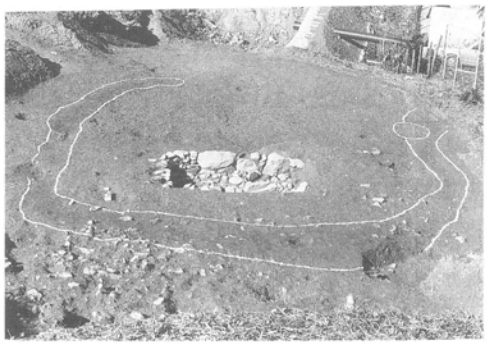


Fig. 12　5号墳検出状況（東から）

Fig. 13　5号墳石室検出状況（北から）

Fig. 14　5号墳敷石検出状況（西から）

Fig. 15　5号墳石室内遺物出土状況（西から）

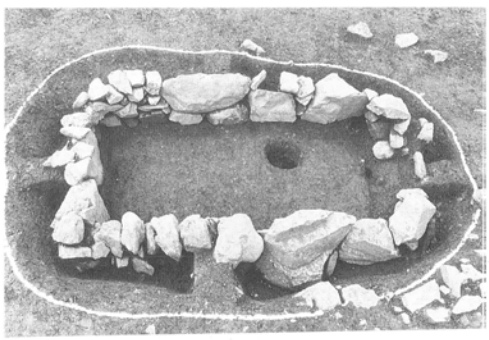


Fig. 16　5号墳石室完掘状況（東から）

上層が黒褐色土、最下層が暗黄褐～黄灰色砂質土で、この堆積は各号墳とも共通している。

遺物は石室南東部の床面上と周溝内・主体部周辺の基盤層上面から少量検出された。

石室床面上のものは須恵器の蓋坏・瑳で、南東側壁付近に集中しているが、蓋坏が倒立したり、坏身が撹乱土中に浮遊する等、撹乱を受け原位置をとどめるものは少いと思われる（Fig.15）。

周溝内からは北東部のコーナー付近からの一括の出土で石室内出土のものと同一の須恵器蓋坏1セットと高坏・土師器甕を検出、土師器は破砕された状態である（Fig.18）。

基盤層上面からは須恵器瑳・坏・甕・土師器甕等の小片を検出しているが、須恵器甕に石室撹乱土中出土のものと同個体のものが有り、古墳の削平時に散乱したものが大部分を占めると思われる。

Fig. 17　　5号墳周溝土層断面（北から）

Fig. 18　　5号墳周溝内遺物出土状況（北から）

Fig. 19　　5号墳石室内出土遺物

出土遺物（Fig.20）

遺物は石室内出土のもの（11～21、Fig.19）、周溝内出土のもの（22・23）と基盤層上面出土のものがある。図示したものは特にことわらないかぎり須恵器である。

蓋坏は11・12、13・14、15・16はそれぞれセット関係で13・14、15・16はほぼ原位置を留めた状態で検出された。11は坏蓋で口径13.5･器高4.6cmの完形品で色調は淡青灰色で焼成はあまい。外面は天井部から体部の½弱までが右回転のヘラケズリで天井部が平担気味になる。他はヨコナデ。内面はヨコナデで底部は手持ちのナデが施される。調整方法は以下の蓋・身とも共通である。外面の下半に縦4本単位の平行線を上下2本で区切るヘラ記号が有り、これは周溝出土のものも含め全ての蓋坏に施されており、縦線が3本単位のもの（12）・4本単位のもの（11・13・15）と5本単位のもの（14・16）の別が有る。12は坏身で受け部径13.8･器高3.9cmの完形品で、立ち上がりが若干高く直線的に延びて内傾する。蓋受け部は体部から外方に突出気味で下部が段状になる。色調は淡青灰色で焼成はあまい。外面の回転ケズリは体部の⅓程で底部が平担気味になる。13は坏蓋で口径12.6･器高4.2cmの完形品。外面の回転ヘラケズリは⅓程である。色調は淡青灰～淡灰色で焼成はあまい。14は坏身で受け部径13.6･器高3.9cmで完形品。外面の回転ヘラケズリは底面とその1～2段上位までである。底部は平担気味になる。色調は淡青灰色で焼成はあまい。15は坏蓋で口径12.8･器高3.9cmの完形品で口縁端が「く」の字状に内屈する。外面の回転ケズリは⅓～½程。色調は淡青灰～淡灰色で焼成はあまい。16は坏身で受け部径14.0･器高4.0cmで完形品。外面の回転ヘラケズリは体部の⅓～½程。色調は淡青灰～淡灰色を呈し焼成はあまい。これら蓋坏は周溝内出土のものも含め器形・調整・焼成ともに同一作者を思わせる程極似している。17は瓶で口径11.1･胴径9.2・器高14.5cmを測かる。口縁

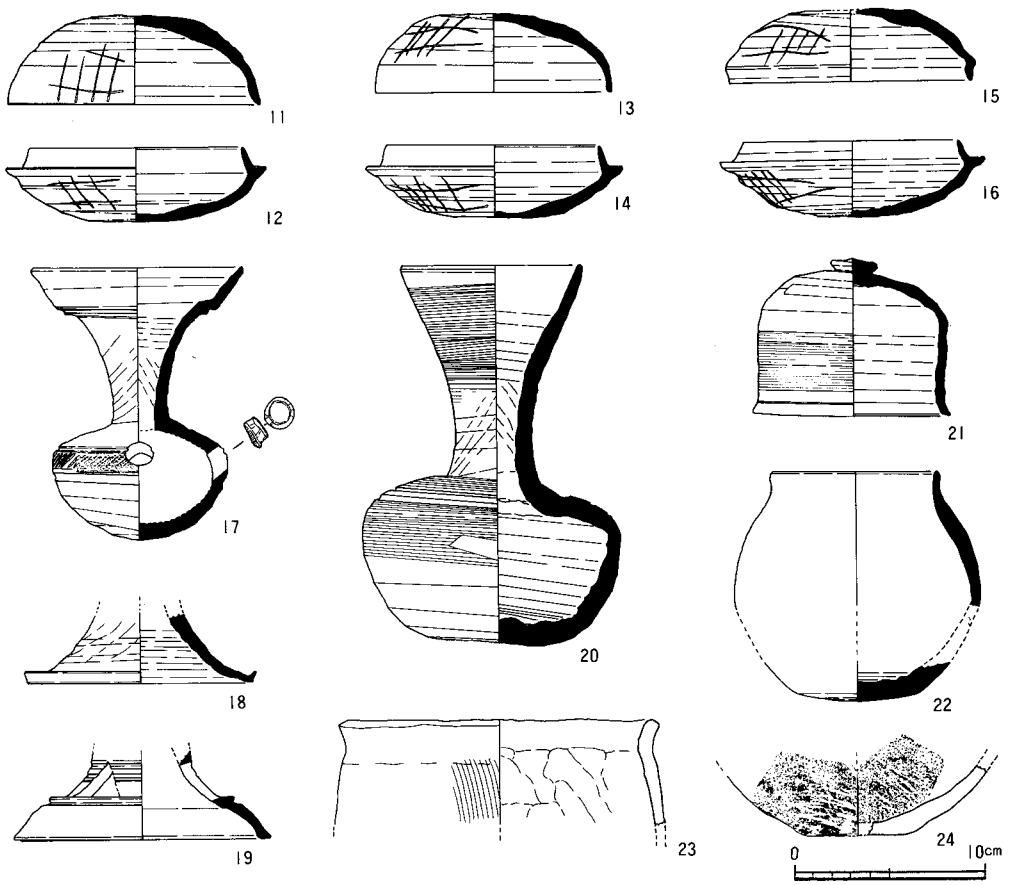


Fig. 20　　5号墳出土遺物実測図（1/4）

の一部を欠く完形品で細い頸部から外反し、段をつくって直線的に大きく開く口縁部をもつ。口縁下に1条胴部に2条の沈線を施し、胴部の沈線間にはカキ目工具による斜行の連続刺突文を施す。内部に体部穿孔時の粘土塊が残っており、外径13.3・内径14.8mmの円形で両側面に低い段が有る。金属板を円筒形に丸めたもので、焼成前の体部をこれで一気に突き抜き、切り離した粘土を内部に押し出したものと思われる。以下は撹乱土中の出土で18は高坏脚部で全周の¼の残存。底径11.8cm。19は脚付長頸壺の脚部で全周の¼の残存。底径13.4cmで中位に三角形の透し穴を3ヶ所穿つ。20は長頸壺で口頸部と体部が分散して出土。口径9.6・胴径13.6・器高20.3cmを測る。口縁と胴の上半にカキ目を施す。21は三脚付有蓋壺の蓋で口径10.4・胴径9.8・器高8.4cmを測る。外面体部上半は回転ケズリ後ゆるいヨコナデ・下半は回転板ナデ。22は北東の基盤面と周溝からの出土の直口壺で口径8.9器高12.2cmを測る。色調は淡黄灰色で焼成はあまく、調整不明。外底は回転ヘラケズリ。23は周溝内出土の土師器甕で色調赤褐色で体部外面タテハケ、内面ヘラケズリ。24は基盤層のもので弥生終末期の甕で外面平行叩、内面ナナメハケ調整。

Fig. 21　　6号墳現況（西から）

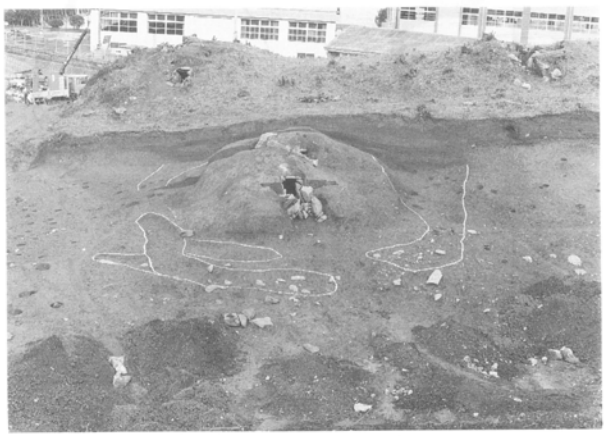


Fig. 22　　6号墳検出状況（西から）

6号墳（Fig.21～37）

6号墳は西に開口する単室両袖の横穴式石室を主体とする馬蹄形墳か方墳である。

東丘陵3・4号墳間の標高25m付近の西側段丘部、I－5グリッドに位置する。

墳丘の東半部は戦後の開墾で上面が平担に整地されており表面からは観察できず、西半部が等高線から円形に突出して墳丘の存在が知れる。見かけの墳丘径で8m程である。石室は天井石の一部が露出し、羨道部の閉塞石の上半が抜き取られて既に開口しており、内部は⅓程土砂が堆積していた。

調査工程中最後の調査で、石室内の清掃と平行して墳丘・周溝の検出を行い、時間の関係上、墳丘内部の調査は南北方向のトレンチ調査のみにとどめた。

墳丘は東半部が調査区外のため全容を明らかにし得ないが、1m程明赤褐色の流土（Fig.23 これが墳丘全面を覆う）下40cm程の黒灰～黄灰色土の包含層下で検出される。天井部と墳裾、殊に前面と墳丘の右前面を大きく削平されているが、残丘で南北9.8m、北側の周溝底面からの高さ2.5mを測る（Fig.22）。

古墳は丘陵斜面と段丘面との地形変換線付近に位置するため、東側の斜面側をおそらく半径7m程の馬蹄形に平担部を削り出して谷側に盛土し（Fig.23・36層）基底面をつくり、これに石室掘方と幅1.5～2.7mの周溝を掘削したものと思われる。周溝は前面と両側を直線的に掘削しており、東側が弧を描いて馬蹄形となるか直線を描いて方形となるかは調査対象区外のため明らかでないが、南北の周溝外径で12.5mを測る。溝底は東から西の谷方向へと下がる。墳丘前面の中央が途切れており、羨道へ連なる墓道部分と思われる。また左前面には内側にもう一本の溝が有ってこれを切っており、追葬時に溝を改削し、墳裾の前面を広げたものと思われる。この部分に多くの須恵器破片を検出している。

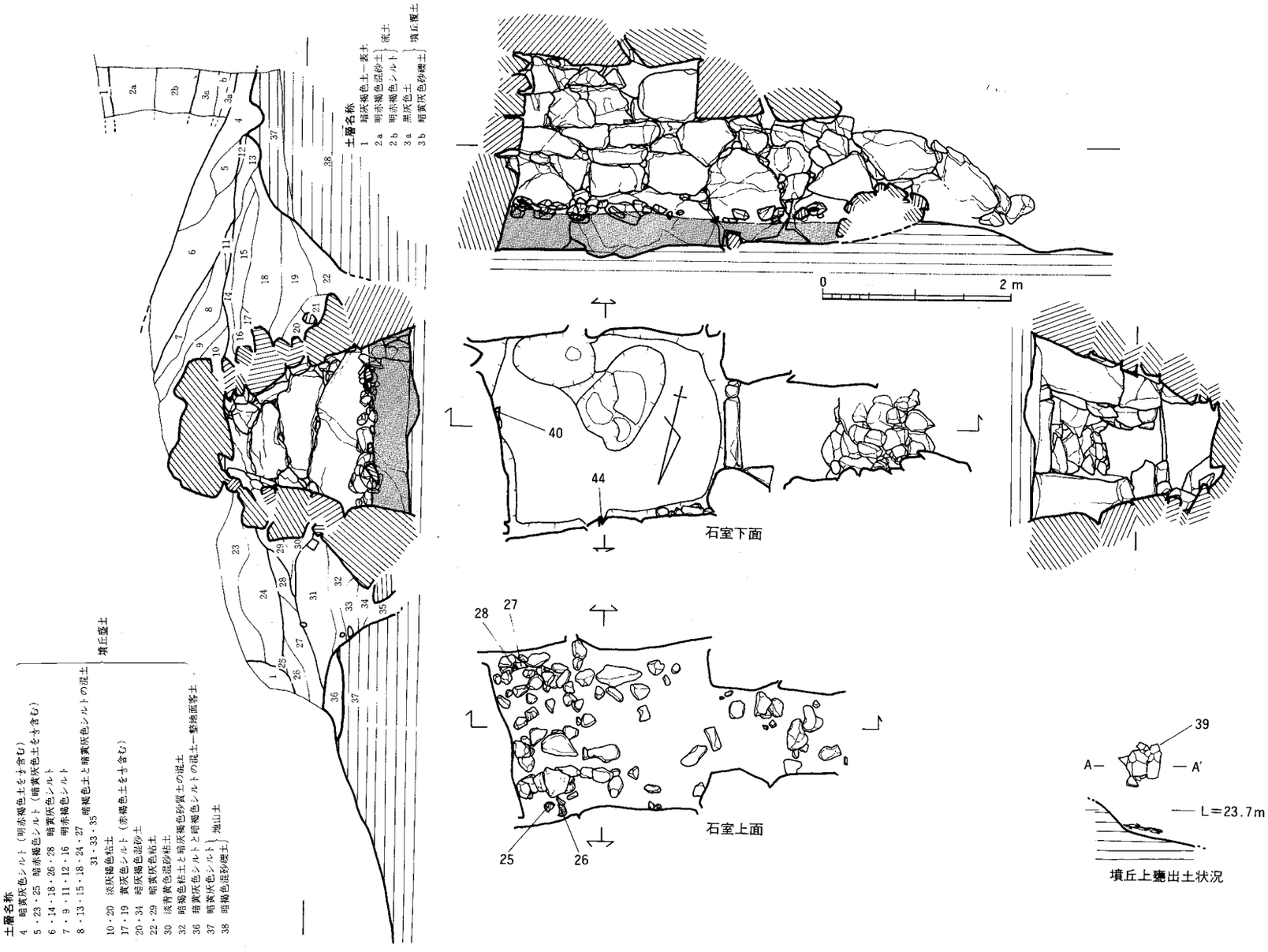


Fig. 23　6号墳墳丘土層図・石室実測図（1/60）

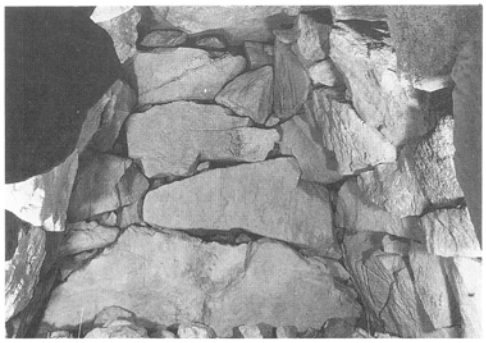


Fig. 24　6号墳上面奥壁（西から）

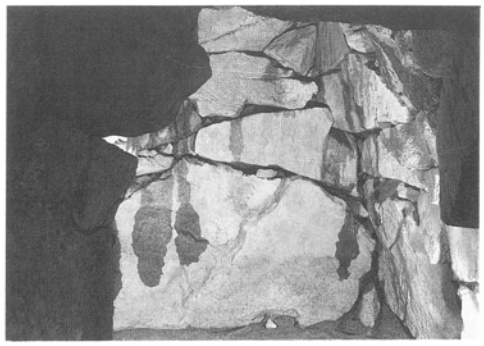


Fig. 25　6号墳下面奥壁（西から）

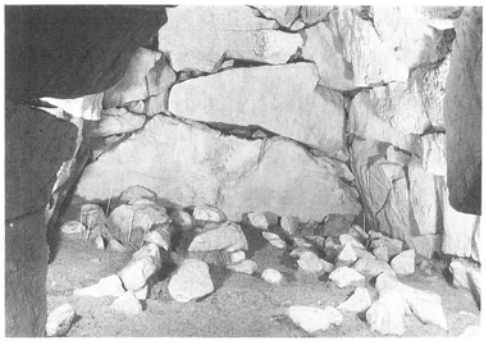


Fig. 26　6号墳石室上部床面（西から）

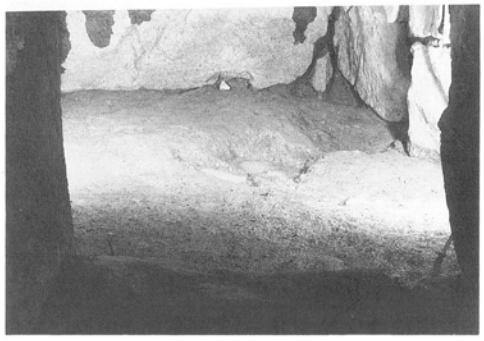


Fig. 27　6号墳石室下部床面（西から）

Fig. 28　6号墳石室上面遺物出土状況（南西から）

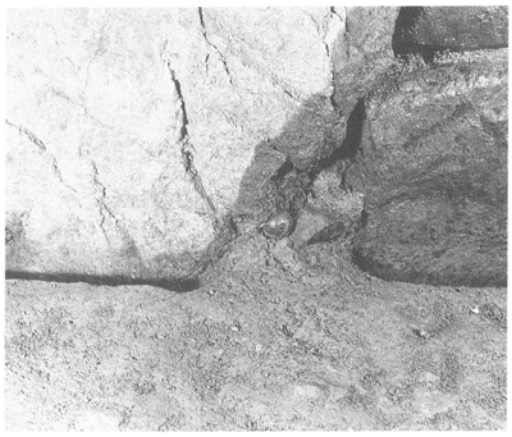


Fig. 29　銅鈴出土状況（南から）

Fig. 30　6号墳上面羨道（東から）

Fig. 31　6号墳下面羨道（東から）

Fig. 32　6号墳羨道閉塞状況（東から）

墳丘盛土は壁体裏込め（12～35層）と天井石被覆(７～11層)、墳丘整形（４～６層）と大きく３工程に分かれ、前２者は幅を薄く範囲を狭く、後者は厚く広く被う傾向が有る。盛土には地山土の黄灰～暗灰褐色シルト～砂質土が多用され粘土は壁石裏の目貼りに用いられるのが多く、全体的にゆるい。

石室掘方は幅4.8m程の断面逆台形で黄灰色シルト（37層）の上面から掘り込まれ、南が高く石室床面までで深さ1.5mを測る。

主体部は主軸をN－77°－Eにとり西に開口する単室両袖形の横穴式石室で残存状態は良好であるが土圧のため右側壁がせり出している。玄室は奥壁側で2.1m、玄門側で1.9m、右側壁2.55m、左側壁1.95mの方形プランで、玄門部は左袖幅50cm、右袖幅48cmである。床面は追葬時に灰褐色混土砂礫で30cm程かさ上げされ、上面に10～45cmの亜角礫で敷石がなされているが前部は撹乱を受けている（Fig.26)。下部の床面には敷石は認められない（Fig.27)。羨道部は幅0.95m、長さ2.6mで玄門部に細長の礫で梱石をもうけ、奥壁から3.5mの位置に閉塞がなされている（Fig.32)。閉塞は石室側に大型の礫を置きこれに面をそろえて小礫を積んだものが2～3段残っている。奥壁は一枚の巨石を腰石としその上に長大な礫を４段持ち送り気味に重ね（Fig.25)、両側壁は奥壁より一段低い２個の巨石を横位に腰石としその上に方形の礫を４段持ち送りで積み上げ横に目を通す。この上に1.5×1.5m程の２枚の天井石を架構する。両袖石は１石を縦位にすえこの上に１～２石積んで羨道側壁と一体化しこの上に楣石を乗せ、これは玄室側壁の５段目と横がそろって一体化している。羨道側壁上端は玄室側壁４段目とそろっており、この上に天井石を１石架構する（Fig.31)。

Fig. 33　　6号墳墳丘北側土層断面（北西から）

Fig. 34　　6号墳墳丘南側土層断面（南西から）

遺物の出土状況は石室の上部床面で敷石間に入り込んで土師器・須恵器（Fig.35・25～28）・鉄刀・刀子残片・石錘を（Fig.28）、床の客土と盗掘による撹乱土中で鉄鉾・鏃・刀子・刀・石突・鉄滓・銅環・銀環・須恵器・土師器・勾玉・ガラス小玉・紡錘車・土製小玉を、下部床面の腰石付近で片付け忘れた様な状況で鉄鉾（40）・銅鈴（44）を検出した。(Fig.29)。原位置を保っているものはない様である。周溝では墓道両脇の古墳前面部を中心にⅢB～Ⅳ期の須恵器大甕・蓋坏・高坏・壺・提瓶・瑟等と土師器高坏・甕・鉄滓等を破砕状態で多数検出した。墳丘上面からも須恵器坏や高坏鉄鎌等を少量検出したが、周溝内のものと接合するものが多く、墳丘の祭祀遺物が周溝内に流れ込んだ公算が高い。

出土遺物（Fig.35～37）

25は坏蓋で口径11.2器高5.0cm。天井部にヘラ記号が有る。26は25とのセットと思われる坏身で受け部径12.0器高4.0cmを測る完形品で底面に25と同種のヘラ記号がある。灰をかぶる。27は土師器坏で口径18.0器高8.0cm。胴外面上半は指頭圧後ヨコナデ、下半は手持ちヘラケズリ後ナデ、口縁部は粗いヨコケンマを施す。28は坏身で⅓の残存。口径10.4器高5.0cm。外底部はヘラ切り後ナデ。29は坏身で受け部径11.7器高3.0cmで½の残存。外面に灰がかぶる。31～35は左前面の周溝出土で高坏が多い。31は提瓶で口縁部を欠くが残存高で24.0cm・胴径20.0・胴厚15.0cm。胴厚の⅓を回転ヘラケズリ、以外にカキ目調整を施し、胴上部に1対の乳頭状の突起を貼付する。32は小形の直口甕で口径10.0器高17.3cm。胴外面は木目直交の平行叩後カキ目調整、内面には平行弧線の当て具痕が残り粗いナデを施す。色調は明青灰色を呈し焼成はあまい。33は有蓋高坏で脚部の半分を欠く、受け部径14.6器高8.5cm。脚部は短かく大きく開き、長方形の透し穴を3ヶ所穿つ。外面に灰をかぶる。34は33と同形の高坏の坏部で受け部径15.0cm。35は2段透しをもつ長脚の有蓋高坏坏部で受け部径12.0cm。脚接合部付近は回

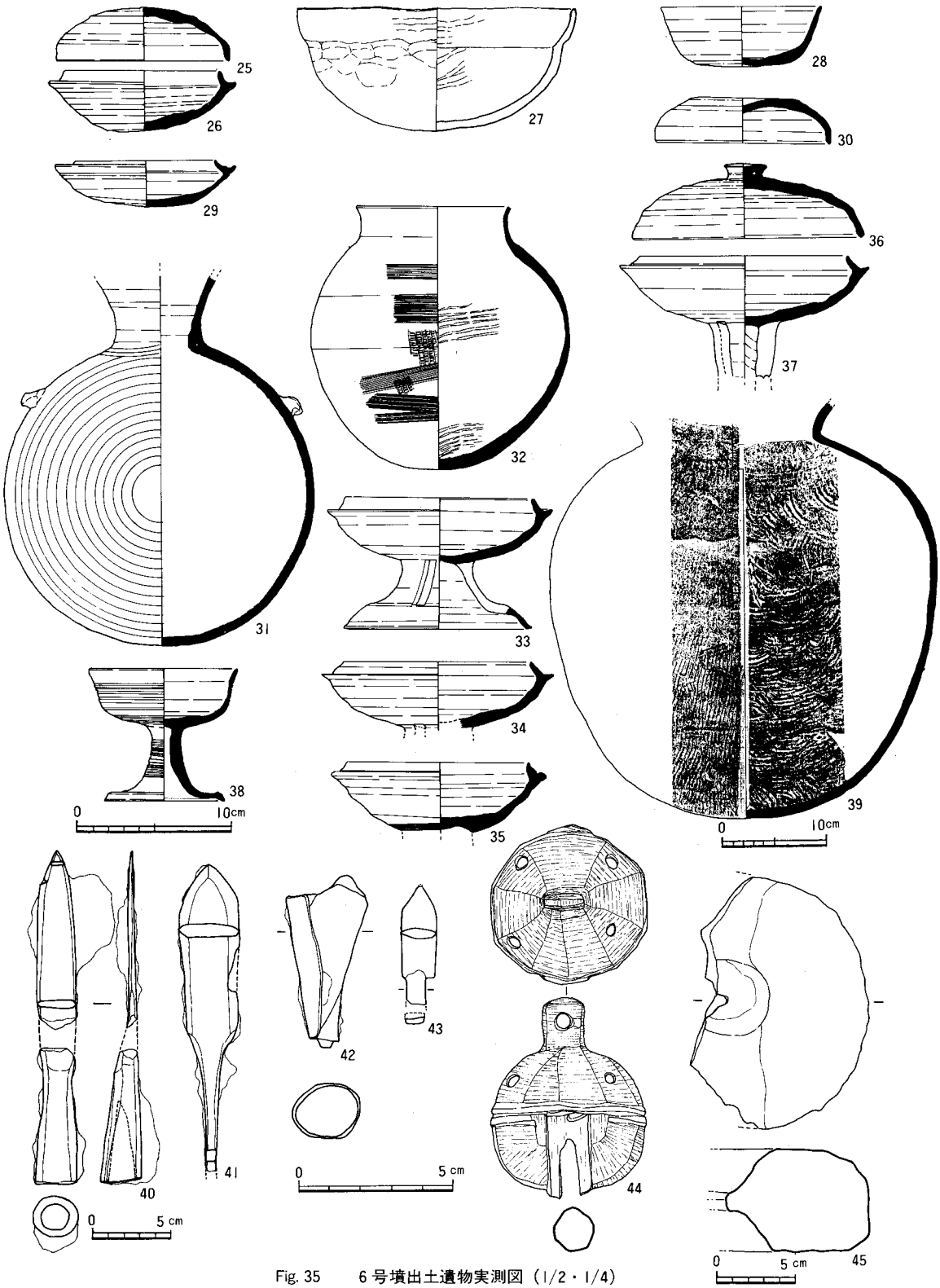


Fig. 35　　6号墳出土遺物実測図（1/2・1/4）

転ヘラケズリ後カキ目調整。36・37は右前面の墳丘上出土。有蓋高坏で36は口径15.0器高5.0cm。37は受け部径16.0cmで細い長脚に２段の長方形透し穴を３ヶ所もつと思われる。38は左前面の墳丘上出土の無蓋高坏で口径9.7器高8.7cmを測る。全周の½残存。39は右前面の墳丘出土の大甕で直下の周溝内、左前面の周溝にと広く散っている（Fig.23）。口縁部を欠くが残存高41.2胴径37.5cmを測る。外面は木目直交の平行叩後カキ目調整。内面に同心円当て具痕が残る。40は下部床面出土の鉄鉾で一部を欠くが全長約22cm、袋部径2.8cmを測る。刃部は鎬がなく2.5×0.6cmの平造で、鈍い両切刃を研ぎ出している。刃部と袋部を鍛造によって溶着したものと思われ、刃部が袋部の片側に沿っており縦断面形は直角三形状を呈している。鉾は２本検出している。41は平造の長三角形の鉄鏃で全長10.1刃幅2.0cm刃厚4.5cmを測る。石室床面間の客土中出土・42は同じく鉄製石突で鉄鉾と対と思われる。鉄板を円錐形に丸めて鍛造・溶着したもので接合部が残る。全長5.6径2.2cmを測る。外面の一部に平織の布痕が残る。内部に鉄鏃の茎が混入、銹着しており、柄に装着状態で埋納したものではない。43も同じく床面間出土の平丸造の長頸鉄鏃で茎部の大部分を欠く。関までの長さ3.0刃幅1.2cm刃厚４mmを測る。44は銅製鈴で高さ6.5cmで、5.0×5.0×5.1cmの球形の体部に1.5×1.3×0.6cmの方形の鈕が上部に付き4.5mmの円孔がある。孔の右横に紐ずれがある。体部の中央に２条の細い突帯が有りこの突帯下で鈕と直交方向に切目が鋳出され幅1.5cm程の突帯状を呈している。体部上半は９面体で４ヶ所に径５mm程の円孔が鋳出され、下半は8面体で、全面に粗いヤスリ目が残っている。体部内には鋳鉄製の径1.3cmの鳴子が入っている。45は滑石製の石錘で径16.4・厚6.6cm重量は半欠で1550gを測る。

Fig. 36　銅鈴44（1/2）

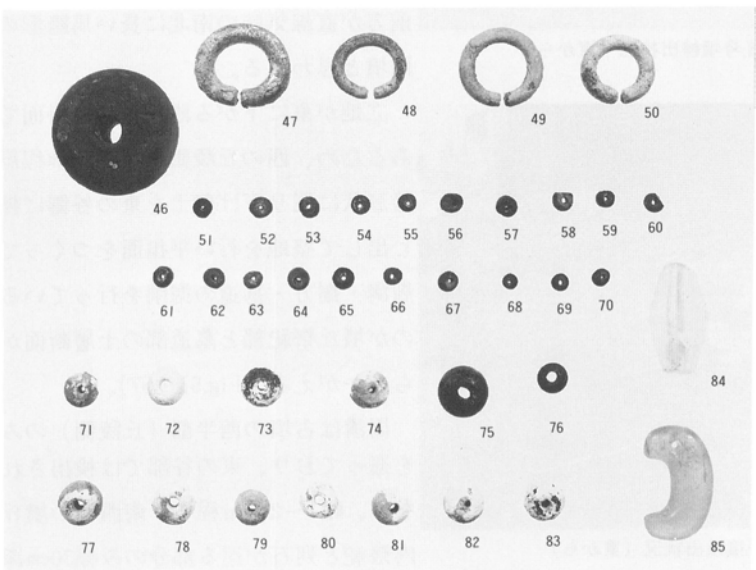


Fig. 37　６号墳石室出土耳環・玉類

Fig. 38　7・8・9号墳現況（東から）

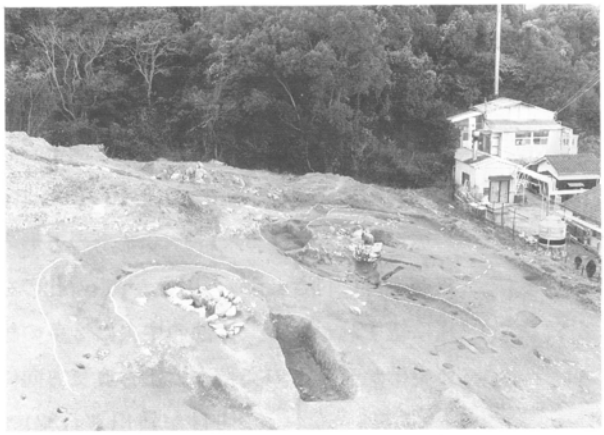


Fig. 39　7・8号墳検出状況（東から）

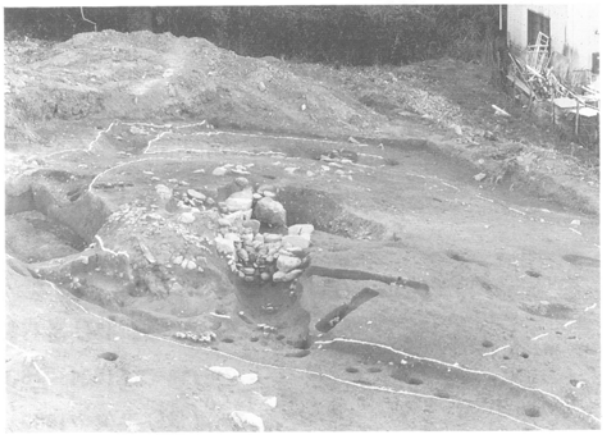


Fig. 40　7号墳検出状況（東から）

7号墳（Fig.38～58）

7号墳は南に開口する単室両袖の横穴式石室を主体とする円墳である。

西丘陵の陵線先端近くの中位段丘面に位置する（Fig.38）。標高20mのC－3グリッド付近でB群に属する。

戦後の開墾で墳丘はほとんど失われており、等高線に若干高まりが認められるが現況からの観察は難しい。試掘調査により確認されたものである。

調査は石室内の掘削・清掃と墳丘・周溝の検出を行い、最終的には封土を除去し石室掘方の検出・掘削まで行った。

墳丘はほとんど削平されており、羨道左側の墳丘が最も高く残っているが、これでも古墳整地面から40cmの高さを残すのみである（Fig.39・40）。よって周溝内法と東側の等高線の若干の変換から復元すると東西10m・南北12mの前方が直線気味の南北に長い馬蹄形の円墳と思われる。

立地が東に下がる段丘上の緩斜面であるため、西の丘陵側を深さ30cm程馬蹄形状に掘り下げ残土を東の谷側に押し出して整地を行い平担面をつくって周溝・掘方・墓道の掘削を行っているのが墳丘祭祀部と墓道部の土層断面からうかがえる（Fig.51・57）。

周溝は古墳の西半部（丘陵側）のみを巡っており、東の谷部では検出されない。幅1～2.4m程で、南西側の墳丘内祭祀と列石が巡る部分のみ幅30cm深

Fig. 41　　7号墳2次墓道検出状況（南から）

Fig. 42　　7号墳2次墓道土層断面（南から）

Fig. 43　　7号墳石室検出状況（南から）

さ20cmの2段掘りとなるが、他は浅い断面U字形を呈している。またこれは墓道も兼ねている様で、南東部は谷と直交方向にゆるく外反して谷方向に延び、北西部では分峡して西の谷筋へと延びている。溝底は西を最高位として東に傾斜している。

石室羨道から連なる墓道は1度改削がなされている。当初の墓道は周溝に沿って、これから大きく右に湾曲して羨道部に連なるもので（1次墓道 Fig. 48)、追葬時には周溝とともにある程度埋没していた様で、周溝と直角方向に羨道にまっすぐ連なる幅広の墓道を改削している（2次墓道 Fig.41)。検出時には多量の礫が中層から出土しており（Fig.43）盗掘時に羨道側壁や閉塞石を投げ出したものと思われる。

墳丘盛土はほとんどが石室掘方裏込めのものが残る状態（Fig.47）であるが、祭祀部分の残丘の土層を観察すると（Fig.51）壁体裏込めと天井石被覆・墳丘整形の三段階に分かれる。壁体の裏込めには地山土の黄灰色砂質土と赤褐色粘土を薄く交互につき固めており、殊に羨道左側部分には10cm前後の礫が多量に用いられ面をなしている（Fig. 52)。また、天井石被覆時にはこの部分にのみ基盤上に高さ40cm程に列石が3段重み上げられ（Fig.50・57）これの内側から被覆の盛土がなされ、この盛土の上面に祭祀の土器が多量に散布する（Fig.45)。整形の盛土は周溝の内法面

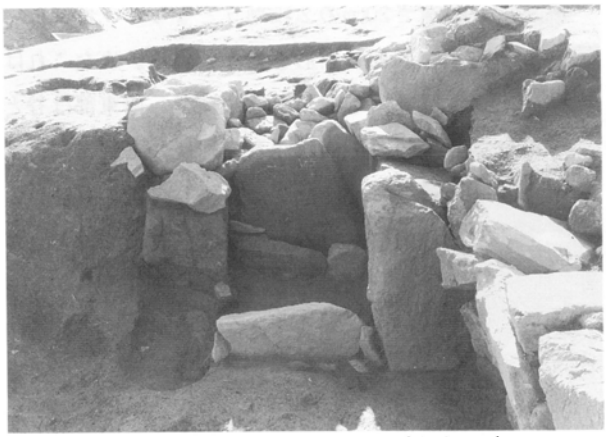


Fig. 44　　7号墳羨道閉塞状況（奥壁から）

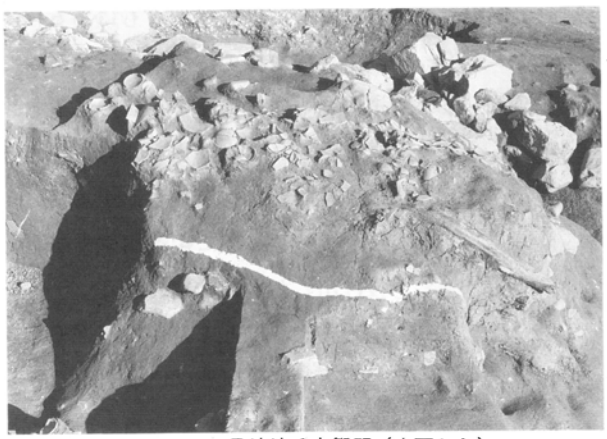


Fig. 45　　7号墳墳丘内祭祀（南西から）

Fig. 46　　墳丘内祭祀遺物

からなされている。

石室掘方は石室主体部に沿った形で墓道とともに掘削されている。玄室部は馬蹄形の基盤整地では作業面の確保が不充分であったらしく、中央に4m×5.5m・深さ50cmの方形に掘り下げさらに奥壁部で2.9m・羨門部で幅1.8m長さ6.2m・深さ0.8mの隅丸長台形の一体化した石室掘方を掘削し、内部に主体部をもうけている（Fig.53・54）。羨道部の掘方は2段になっており下段部分が墓道に連なり、上段部分に袖石と次の腰石を除いた羨道側壁が一段高く構築されている（Fig.55）。

主体部は主軸をN－22°－Wにとり南に開口する単室両袖形の横穴式石室で残存状態は極めて悪く腰石上に1～2石残るのみで右奥壁と側壁・袖石の腰石は抜き取られ撹乱されている。検出時には壁体の中型の礫が内部に多量に投げ込まれた状態であった（Fig.43）。玄室は右側の腰石が全て抜き取られているため明らかでないが中軸から折り返した幅とすると約1.8m・左側壁2.0mの方形プランで玄門部は左袖幅45cmである。奥壁は2～3石と思われるが幅80cmの偏平な礫を縦位に並べ腰石とした様である。左側壁は奥に奥壁と同程度の腰石を、手前に長い礫を横位に持ち送って2段重み上げ、袖石は長い一石を縦位に置き、奥壁腰石に高さをそろえ横に目を通している。

羨道は幅0.8m・長さ2.8mで、袖石

Fig. 47　7号墳東側墳丘土層断面（南から）

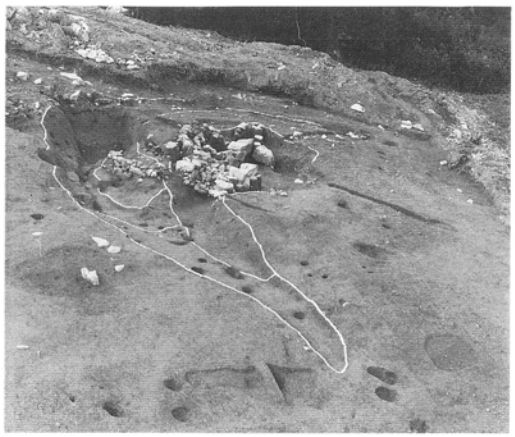


Fig. 48　7号墳封土除去状況（南から）

Fig. 49　7号墳Ⅰ次墓道土層断面（南から）

Fig. 50　7号墳墳丘内列石（南西から）

Fig. 51　7号墳墳兵内祭祀下土層断面（南から）

Fig. 52　7号墳石室裏込め石

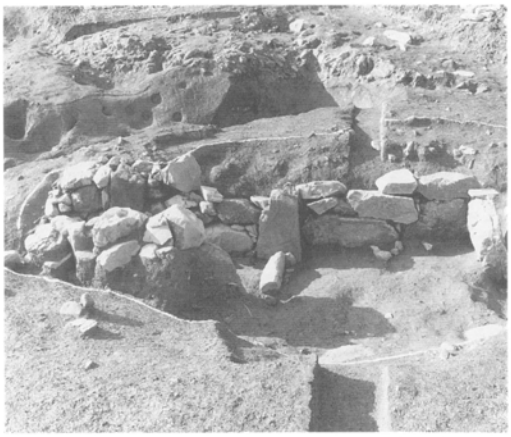


Fig. 53　7号墳石室掘方検出状況（東から）

Fig. 54　7号墳石室掘方検出状況（南から）

Fig. 55　7号墳羨道部側壁（東から）

Fig. 56　7号墳腰石裏込め（北西から）

の次に110×60cm程の礫を横位に置いて腰石とし、これより手前は床面より30cm高い掘方の上段に30cm程の小礫を並べて腰石とし上部を袖石横の腰石にそろえ、この上に一回り大きな礫を重み上げている（Fig.55）。玄門部と、奥壁から2.9mの位置に細長い礫で梱石をもうけており第1梱石の外側から閉塞がなされている（Fig.44）。閉塞は手前に幅70cmと30cm高さ70cmの偏平な板石を蓋とし、この外側に15cm程の小礫を幅1.1mにわたって整然と重み上げている。上部の構造は削平のため不明である。

遺物は石室撹乱層中より須恵器蓋坏・甕の小片・滑石製臼玉・鉄鏃・鉄片、墓道・周溝からは墳丘上の祭祀土器が半分程流れ込んだ状況で、羨道左側墳丘内の天井石被覆盛土上面から須恵器・蓋坏・高坏・瑳・壺・甕等を一部撹乱を受けていたが、破砕された状態で墳丘をとりまく様に多量に出土している（Fig.45）。

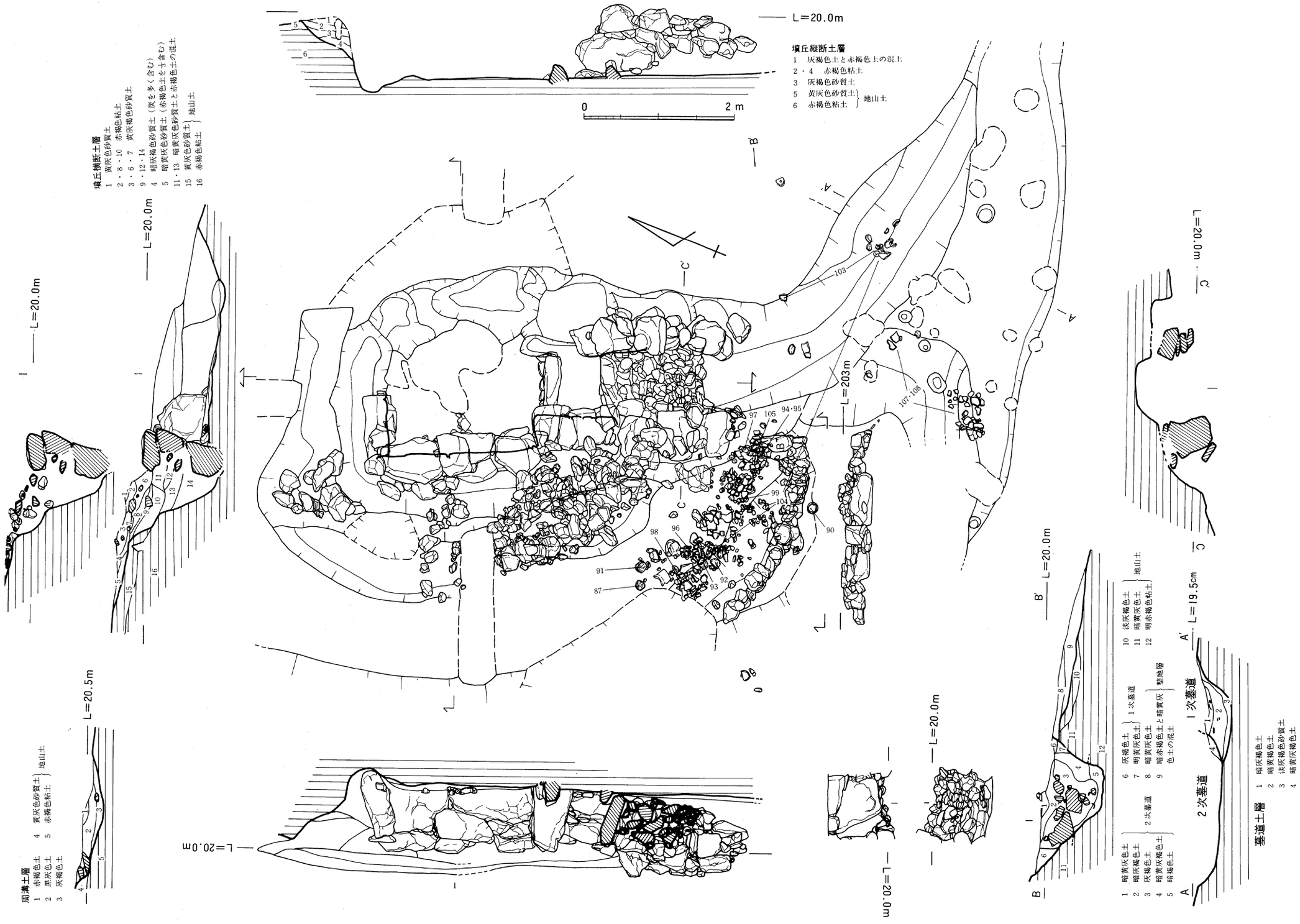


Fig. 57　7号墳石室実測図・土層断面図（1/60）

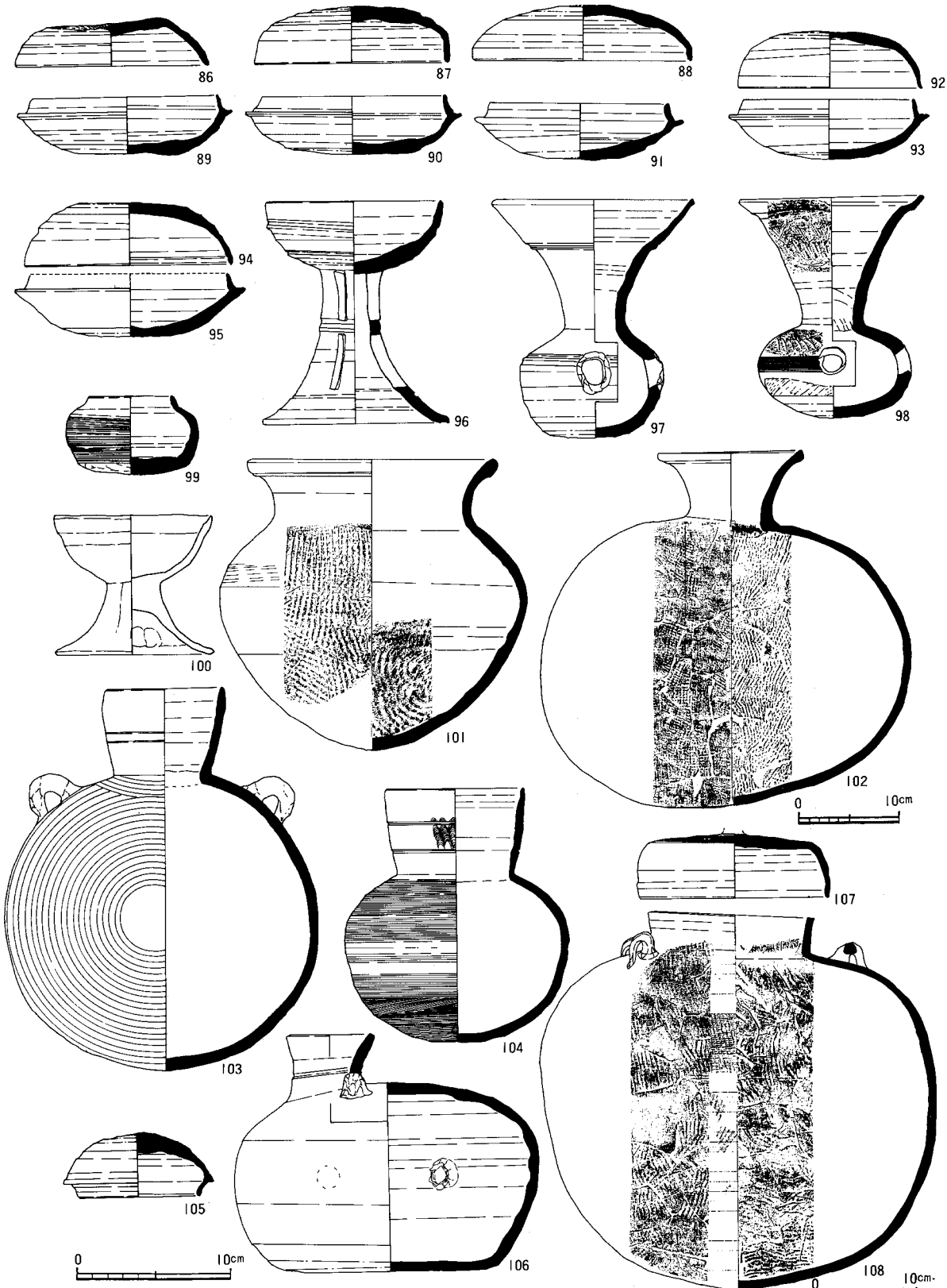


Fig. 58　7号墳遺物実測図（1/4・1/6）

出土遺物（Fig.58・46）

103が墓道、106～108が周溝からの出土で、これ以外は墳丘内祭祀の遺物である。文中で特にことわらない限りは須恵器を示している。

86～88は坏蓋で、86は口径12.9器高3.2cm。天井部はヘラ切り後ケズリ様の板ナデを施す。87は口径13.0器高3.8cm。色調灰白色で焼成良好。88は口径14.6器高3.6cmで色調灰白色・焼成良好。外面が灰をかぶる。89～91は坏身で89は受け部径14.3器高4.0cmで体部外面の⅓程は右回転のヘラケズリで以外はヨコナデである。焼成良好。90は受け部径14.3器高4.0cmで底部は回転ヘラケズリ後ナデを施し平担気味となる。焼成はあまい。91は受け部径14.0器高3.8cmで体部外面の⅓程まで回転ヘラケズリ。焼成良好。92・93と94・95は蓋坏のセットで92は口径12.4器高3.8cmで回転ヘラケズリは体部中位まで。93は受け部径13.4器高4.0cmで同じく体部中位までのヘラケズリで底部が丸い。94は口径13.8器高4.2cmで口縁内面に段が残る。95は受け部径15.2器高4.2cmで94とともに生焼けで明赤褐色を呈する。96は無蓋高坏で体部が丸い。口径11.0器高15.0cmで脚部に長方形の２段透しがある。97・98は瓶で97は幅広の有段の口縁で口径13.0器高16.0cm。体部の穿孔外縁は焼成後に打ち欠きを行っている。98は幅の狭い有段の口縁部を有するもので口径12.4器高15.0cm。頸部上位に２段の波状文を、胴上位にカキ目工具による斜行の連続刺突文・中位にカキ目を施す。胴下半は手持ちヘラケズリ後回転ヘラケズリを施す。99は小形の短頸壺で口径5.5～6.5器高4.2cmで焼けひずむ。胴外面はカキ目で底部は手持ちヘラケズリを施す。100は土師器高坏で口径10.5器高9.3cmで明赤褐色を呈する。器壁が荒れており調整不明。101は小型の甕で口径16.6器高19.5cmで底部が尖底気味になる。外面は木目直交の平行叩で上半はヨコにナデ消す。102は横瓶で口径14.8器高35.0最大胴径40.0cm。外面は木目直交の平行叩後カキ目調整、内面には平行弧線の当て具痕が残る。103は提瓶で口径8.0器高26.0胴径20.8胴厚12.6cm。胴部の⅔はカキ目で以下は回転ヘラケズリである。裏面は板ナデ後ナデ消しで平担になっている。この胴の上位に一対の粘土紐による吊り手を貼付する。調整はヘラナデ。104は直口壺で口径9.0器高17.0cmで口縁部中位の２条の沈線間に波状文を施す。胴部はカキ目調整後、上半はヨコナデを施す。105は長頸壺の蓋と思われ、受け部径で9.8器高4.3cm。体部の½程が回転ヘラケズリで他はヨコナデ。外面は灰をかぶる。106は平瓶で口径6.0器高16.0胴径20.4cmを測る。胴中位に径1.5cm程の穿孔後粘土で再び埋めた痕跡が一ヶ所有り、大型の瓶を意図して作成中、平瓶に変換したものと思われる。口縁の後、中央寄りに一対の角状の突起を貼付している。107・108は蓋壺のセットである。107は壺蓋で口径18.2器高6.4cmでつまみを欠失している可能性がある。上面は回転ヘラケズリ後カキ目調整他はヨコナデである。108は五耳壺で口径16.6器高37.6胴径39cmを測る。口縁は直口で口唇部は金属による切り離し痕が有る。胴外面は木目直交の平行叩後上半はカキ目調整、下位はヨコナデ消しが施される。内面には同心円の当て具痕が残る。周溝を中心に羨道・墓道・墳丘上と広く散布している。

Fig. 59　8号墳石室検出状況（東から）

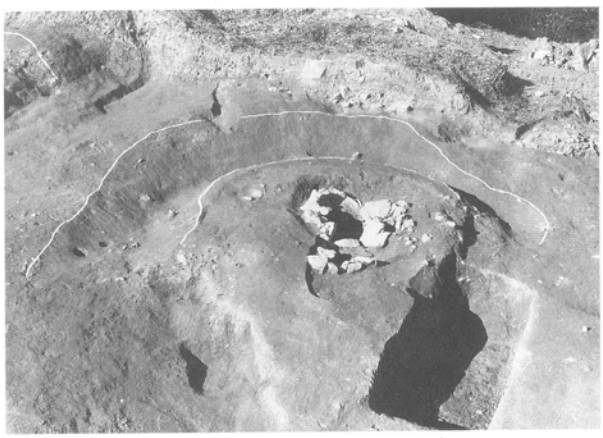


Fig. 60　8号墳全景（東から）

Fig. 61　8号墳羨道部遺物出土状況（東から）

8号墳（Fig.59～70）

8号墳は東に開口する単室両袖の横穴式石室を主体とする小円墳で、西丘陵の東側谷の丘陵斜面と中位段丘の地形変換線付近に立地し、7・9号墳間の標高21m付近、D－4グリッドに位置し（Fig.38付図）、B群に属する。

7号墳同様、戦後の開墾で墳丘はほとんど失われており、等高線にも変化がほとんどみられず、地表からの確認は不可能な状態にあった。これも試掘調査によって確認されたものである。

墳丘は北と西側で基盤層から25cm程が残るのみで他は基盤層が露出する程の削平を受けている（Fig.60）。削り残された周溝により復元すると南北で径8.5m、前方が削平と流失によって周溝が不明だがおそらく前面が直線的になる馬蹄形の円墳になると思われる。

7号墳と同様に東に下がる斜面と段丘上に立地するため、平担な作業面を確保するために西の斜面側を12.5×6mの馬蹄形に掘り下げて平担面をつくり、ここに幅1.8mの周溝と石室掘方を掘削している。古墳の前面（谷側）が失われているため残土を前面に押して整地を行ったかどうかは不明。

周溝は西側の地山整形面の下端付近に掘削され、幅1.5～2.8m程で墳丘に対して幅広のものである。溝外径で11.2mを測る。古墳前面は欠失して不明であるが丘陵側から谷側へ幅が広がる。溝底も同様に谷側に下がっている。

Fig. 62　8号墳羨道部遺物出土状況（南から）

Fig. 63　8号墳羨道部出土遺物

Fig. 64　8号墳石室（北から）

Fig. 65　8号墳墳丘南側土層断面（東から）

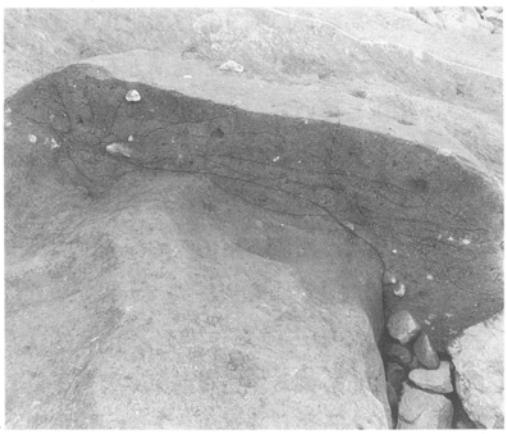


Fig. 66　8号墳墳丘西側土層断面（南から）

墳丘墓底面からの深さ20cmで断面は浅いU字形を呈する。

墳丘盛土は西と北側で25cm程の高さが残っているのみで大部分は掘方の壁体裏込めである（Fig.65・66）。暗黄灰～暗灰褐砂質土と赤褐色粘土の地山土が用いられ、掘方上面まではこれらを交互に薄くつき固めている。この腰石上端までの埋込みが終了すると、周溝の内側に幅1.4cm深さ20cm程の内周溝を掘削し、これにかけて壁体の裏まで水平に広く層を重ねており、他の古墳の様な天井石被覆までの墳丘内部の細かな

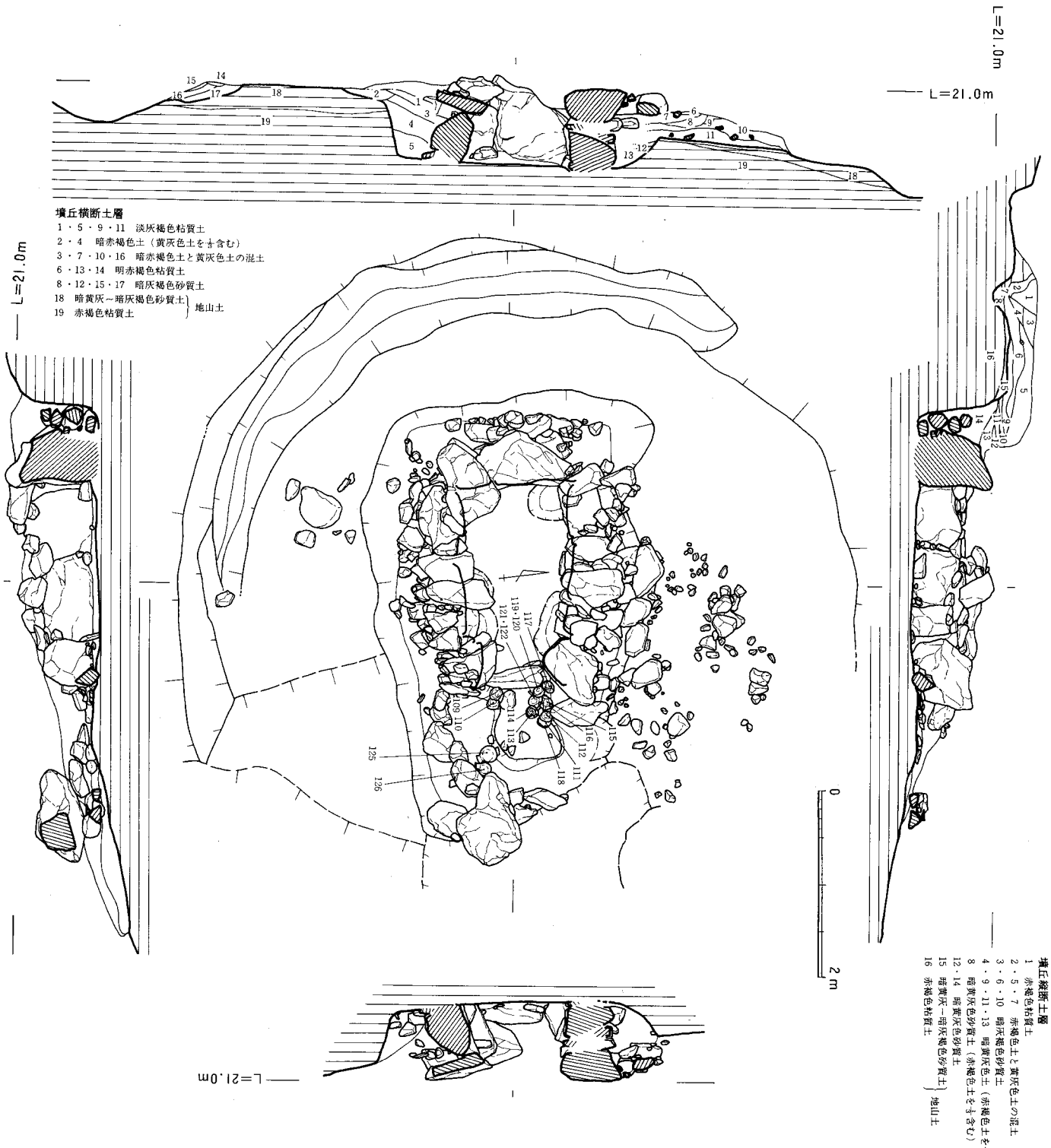


Fig. 67　　8号墳実測図（1/60）

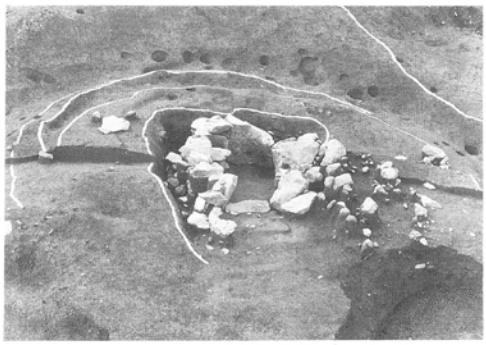


Fig. 68　8号墳完掘状況（東から）

Fig. 69　8号墳完掘状況（南西から）

層位が見受けられず、裏込めと同時に大部分の墳丘整形も行っている様である。

石室掘方は石室主体部に沿った形で羨道部と一体化した、奥壁側で幅2.8m・羨門側で幅2.1m、長さ4.5mの隅丸長台形のプランで西側で深さ65cmを測る断面逆台形のものである（Fig. 68・69）。

主体部は主軸をN－82°－Wにとり東に開口する単室両袖形の横穴式石室である。残存状態は極めて悪く、腰石上に1石残るのみである。両側壁の石は抜き取られている。検出時では壁体の礫を内部に投げ込んで埋められた状態であった（Fig.59）。

玄室は奥壁に1.2玄門側で1.0m、左側壁1.55m右側壁1.65mの長方形プランで（Fig.64）、玄門部で右袖石が動いているが、左右袖幅15～30cmを測る。奥壁は偏平な礫を縦位に2石置いて腰石とし、左側壁は同様に2石を横位に、右側壁は3石を腰石とする。袖石は小振りの礫を縦位に置いている。

羨道部は原位置に石が全く無いが抜き跡から復元すると幅70cm長さ1.4m程で床は谷に向けゆるく下がる。袖石の羨門側に細長の礫を置いて梱石としており、この外側に須恵器蓋坏と提瓶、鉄器を検出した（Fig.62・63）。

遺物の出土状況は原位置をほぼ保っている羨道部と、石室撹乱土中より須恵器の蓋坏・瓿・盌・甕・土師器坩の小片と鉄鏃を3点検出した。周溝は南と西側に遺物がまとまっており須恵器の甕・坏・提瓶・壺等の破片を主に検出している。

出土遺物（Fig.63・70）

123・124・127～129は石室撹乱土中からの出土で他は羨道部出土の一括遺物である。

109～124は蓋坏で117・118以外は上下で一対のものである。109は口径13.4器高3.8cm。110は受け部径13.6器高4.0cm。外面全面に灰がかぶる。111は口径13.5器高3.9cmで天井部は板ナデ後指ナデを施され平担になる。112は受け部径13.4器高4.4cmで底面はナデられ、小さめの平担な底部になる。外全面に灰がかぶる。113は13.0×3.6cm、114は12.7×3.7cmで底部は丸い。外面全体に灰がかぶり気泡が目立つ。115は13.0×4.1cmで天井部は若干丸い。116は13.8×4.0cm。

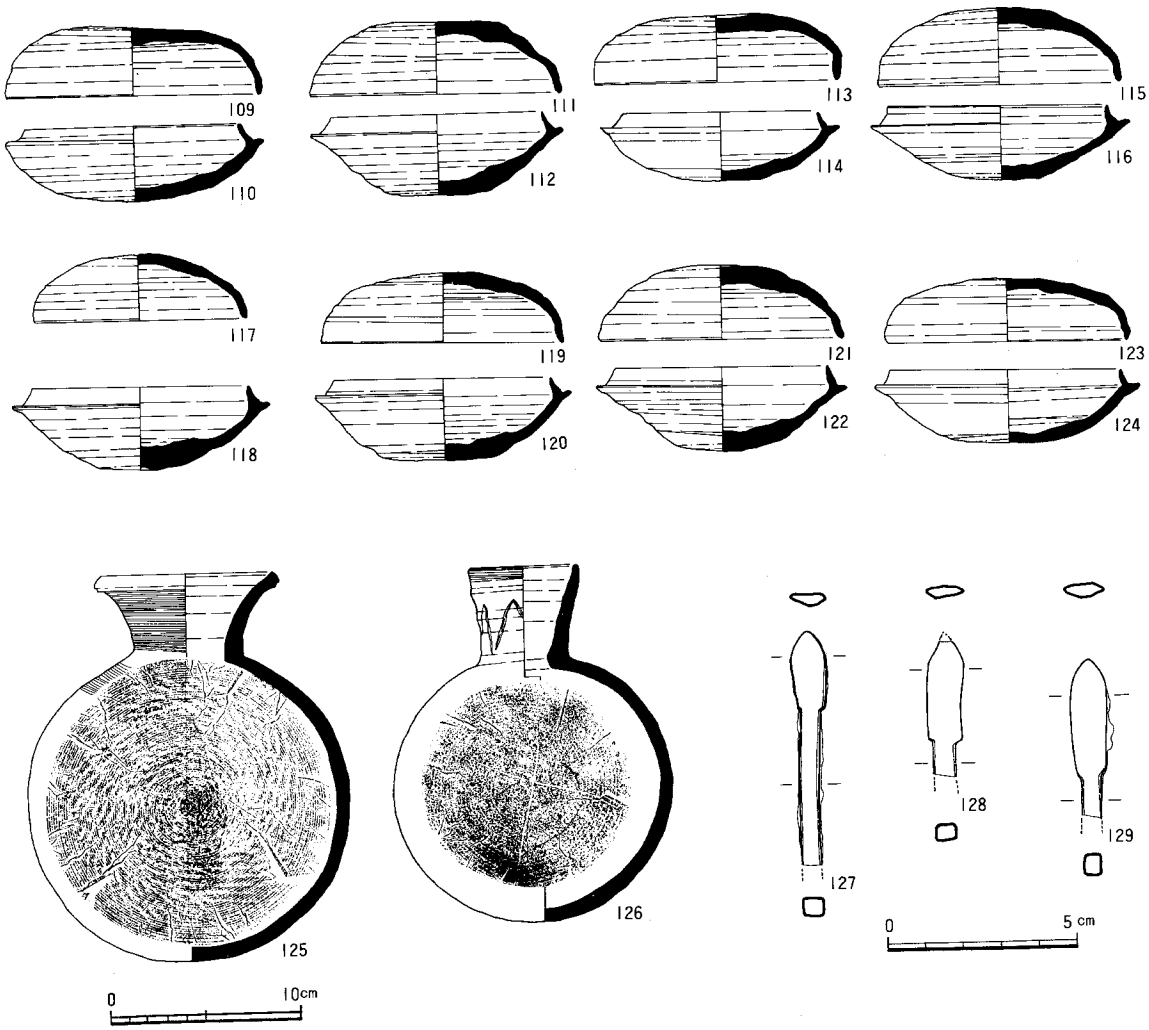


Fig. 70　　8号墳遺物実測図（1/2・1/4）

外面全体に灰がかぶる。117は11.2×3.5cmと小振りで丸い天井を持つ。118は13.6×4.4cmで外面に灰がかぶる。119は13.0×3.8cmで天井部はヘラケズリ後板ナデ。口縁の一部に灰かぶり。120は13.6×4.4cmで底部はケズリ後板ナデ。外面に灰かぶり。121は13.0×4.0cm、122は13.3×4.5cmで外面が灰かぶり。123は13.0×3.4cmで124は14.0×4.0cmで外面が灰かぶり、125・126は提瓶で125は口径9.7器高20.5胴径17.0cmで前面は平行叩後カキ目裏面はカキ目後回転ヘラケズリで平担。126は口径6.0器高・胴径14.8cmで前面はカキ目、裏面の3段程が回転ヘラケズリで平担になり他の甕破片が溶着している。口縁部にヘラ描きの波状文を施す。127～129は長三角の長頸鏃で127は片丸造128・129は両丸造と思われる。

Fig. 71　　9号墳全景（南東から）

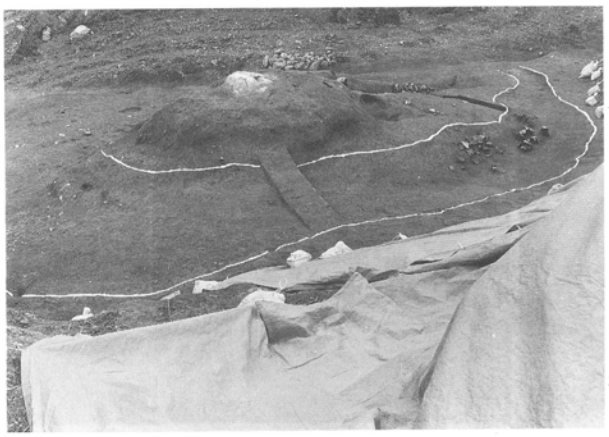


Fig. 72　　9号墳全景（南西から）

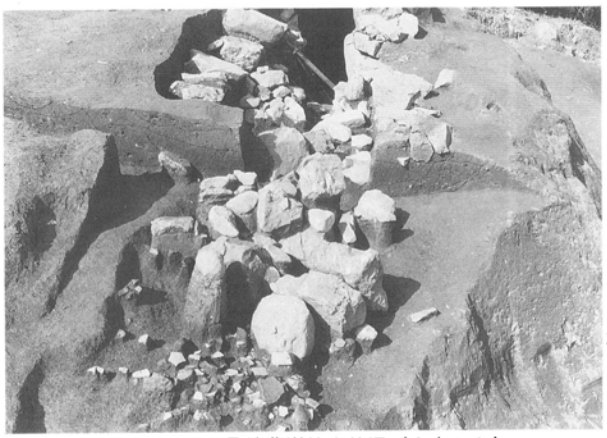


Fig. 73　　9号墳墓道検出状況（南東から）

9号墳（Fig.71～81）

9号墳は南東に開口する単式両袖の横穴式石室を主体とする円墳である。

西丘陵の東側斜面、8号墳の南15m程に位置する。標高24m付近でE－5・6グリッドにあり、B群に属する。

西側の丘陵斜面中位に60×30m程の平担面があるが、これは戦後にキャンプ場を開設するために造成された部分で、その際多量の土砂を北と東に押し出しており、9号墳はその客土の中に完全に埋没していたため現況では全く知られていなかった（Fig.38）。墳丘東側に土取りの跡が有り、断面に若干の高まりが見えていたため調査中に試掘を行い、存在を確認したものである。

調査は石室内と墓道の排土と清掃、墳丘・周溝の検出を行い、墳丘の断ち割り後封土を除去し石室裏込めを露出・掘方の検出・掘削までを行った。

墳丘は谷に面した東側と南側を大きく削平され崖状になっており、他は墳丘裾部を削り取られ、玄室上部に径6m程の小さな残丘となって残っている状況で天井石は露出している（Fig.71・72）。西側の周溝底からの高さは80cm程である。よって残っている周溝から復元すると南北16m・東西9m程の南北に長い不整形の楕円形の墳丘であった様である。墳丘前面の周溝はゆるく湾曲しており、他の号墳の様に馬蹄形にはならない様である。

地山整形は周溝部と石室掘方部分の

Fig. 74　9号墳墓道遺物出土状況（南東から）

Fig. 75　9号墳石室閉塞状況（南東から）

Fig. 76　9号墳石室閉塞状況（北東から）

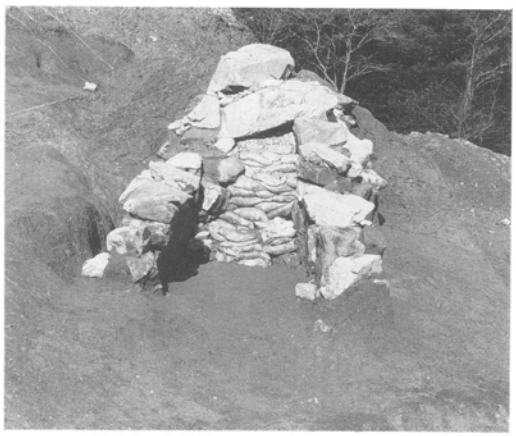


Fig. 77　9号墳墳丘土層断面（南東から）

Fig. 78　9号墳完掘状況（南東から）

Fig. 79　9号墳完掘状況（南西から）

Fig. 80　9号墳石室実測図・土層断面（1/60）

２段で行われており、周溝部分で高さ１ｍ程の切り下げを行ってこれがこのまま周溝となっており、玄室後ろの北・西部分では平担面を形づくっている。石室掘方はこの中央部に、東と南端を欠失しているため規模が明らかでないが、現存部で幅5.7ｍ長さ11ｍ・丘陵側で深さ1.5ｍの矩形に掘削し、東の谷側を排土で整地し（65・66・67層）その内部に石室に沿うかたちで幅3.7ｍの長方形に30cm程掘り下げ主体部を構築している（Fig.78・79）。羨道部はこのままの幅で４ｍ延び、床面は谷側にゆるく傾斜しさらに墓道に連なる。墓道部は羨門部から中央を幅1.1ｍ深さ25cm掘り下げ２段になっており断面は浅いＵ字形を呈して、この部分に遺物が集中して出土する（Fig.74）。追葬時の改削による土層の切合は認められない。

周溝は北西の丘陵側で最も幅が広く3.8ｍ、前面にかけ細くなり1ｍを測る。墳丘盛土が地山整形の底面及び外側法面からなされ、これが周溝の内法面となっている。断面は浅いＵ字形である。溝底は玄室西部分を最高所として谷側に2.8ｍの落差で下がっている。

墳丘盛土は掘方上面までの壁体裏込めと天井石被覆の細かな層位で地山土の赤褐色粘土と暗黄灰色土・灰褐色土とを交互に堅くつき固めている。壁体の目貼りには灰白色混砂粘土が用いられる。墳丘整形の盛土は削平のためほとんど残っていない（Fig.77）。

主体部は主軸をＮ－45°－Ｗにとり南東側のやや谷頭側に開口する単室両袖形の横穴式石室で残存状態は良好であったが長年の西側からの厚い客土の土圧で左側壁がせり出し、ことに左袖石の突出が著しい。石材は全て花崗岩である。玄室は奥壁側で1.8ｍ、玄門側で2.0ｍ、右側壁2.4ｍ、左側壁2.2ｍの長方形プランで、玄門部は右袖幅40cmでこのまま幅広の羨道部につらなっており、しまりのない平面形を呈している。羨道の幅1.4ｍ、長さ3.9ｍで奥壁から3.5ｍの位置に閉塞がなされている（Fig.75・76）。閉塞には石室側に70cm程の大型の礫を２石置いてこれの上面及び背面に幅1.5ｍ程に径15cm程の小礫を積み上げており右側壁側が盗掘により大きく崩落している。奥壁には高さ1.2ｍの偏平な一石を横位に置いて腰石とし、この上に3～4石の小礫を持ち送り気味に積み上げ1.2×1.85×0.7ｍの天井石一石を架構している。左右側壁とも奥壁腰石と同程度の高さの礫を２石腰石にすえ、この上に若干小振りの礫を積み上げこの上にさらに小礫を１～３段小口に持ち送りで積み上げている。目は腰石上一段目の礫で横に通している。両袖石は方形の礫を縦位にすえこの上にもう一石積んで楣石を架構する。羨道部は袖石より一段低い腰石を横位に３～４石置き袖石に接して３石を小口に積み上げ楣石と面をそろえて一石を天井に架構した様で、これは検出時に羨道内に転落していた。これから墓道方向に３段階に一石ずつを減じ羨門部では腰石の半分の高さの一石のみの側面が三角形の側壁を構築している。目は横に通っている。

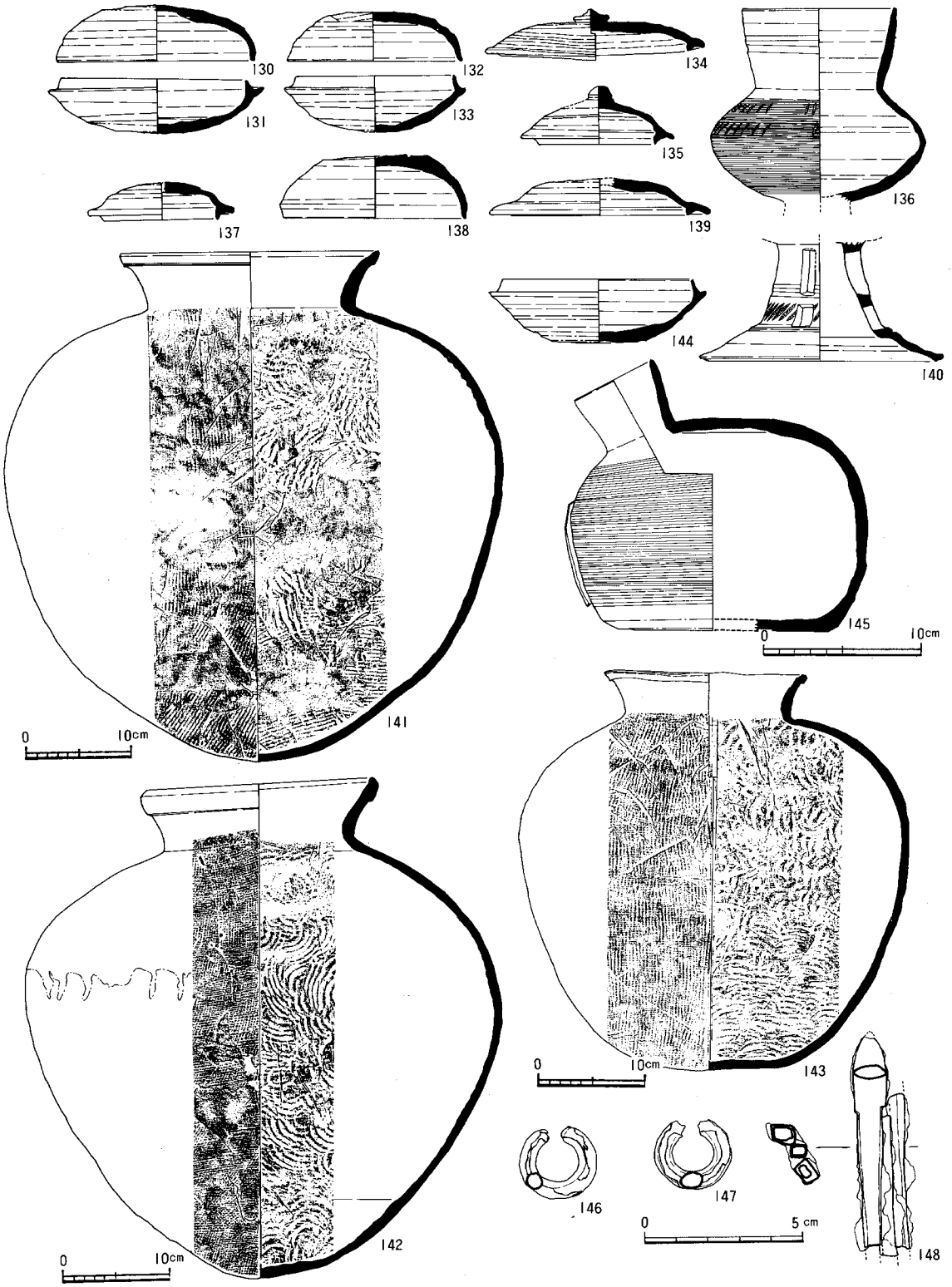


Fig. 81　　9号墳遺物実測図（1/2・1/4・1/6）

遺物は石室撹乱土中より須恵器蓋杯・脚付壺・鉄鏃３点・刀子２点、羨道部より甕・蓋坏・平瓶・横瓶・鉄鏃２・刀子１を検出、多くは墓道部のものと接合する。墓道部では大甕４点と横瓶・平瓶・高坏・壺等大型品の破片と鉄滓を多数検出した。墳丘及び周溝からは大甕２点と壺・甕・坏を検出、周溝のものは墳丘上から流出したもので、一部は墓道にも散っている。

出土遺物（Fig.34）

130～136･148は石室撹乱土中より出土、137～143・146・147は主に墓道部からの出土。144･145は羨道左側の墳丘内からの出土である。146～148以外は須恵器である。

130～133は対になる蓋坏と思われる。130は坏蓋で口径12.5器高3.5cmで体部の½弱に回転ヘラケズリを施す。墓道の破片と接合する。131は坏身で受け部径13.6器高3.6cmで体部の½弱に回転ヘラケズリを施し底部は丸い。外面が灰をかぶる。132は口径11.0器高3.0cmを測る坏蓋で天井部から⅓程に手持ちヘラケズリを施す。133は坏身で受け部径11.5器高3.5cmを測る。134は坏蓋で受け部径14.0器高3.3cmで宝珠形のつまみを有し偏平な体部で身受けの返りは低い。135も坏蓋で受け部径9.7器高3.8cmで擬宝珠形のつまみを有す。体部は深く身受けの返りは若干高い。136は脚付直口壺で口径9.8胴径13.6cmで外面はカキ目、一部ヨコにナデ消し、肩部に２条カキ目工具による連続刺突文を施す。以上の134・135以外は破片が墓道に散っている。137は坏蓋で受部径9.2器高2.4cm。138は坏蓋で身と蓋とが上下逆転する時期とされるが明確な使用状態でなく蓋とした。口径11.5器高4.0cmで天井部は平担でヘラケズリ後ナデられる。139は坏蓋で受け部径14.0つまみの有無は不明だが器高2.4cmの偏平な体部で身受けが大きく返りは低い。140は脚付壺の脚部で底径15.5cm、2段の長方形透し穴を３ヶ所施し、下部にカキ目工具による連続刺突を施す。136と接合する可能性が有る。141～143は甕で墓道で破片が入り混っている。141は口径24.6器高49.5胴最大径は中位より若干上位に有り46.5cmを測る。胴部外面は木目直交の平行叩で部分的にヨコナデ・カキ目が施される。内面の上半は同心円の当て具痕が残り下半は平行の当て具痕が残る。破片の一部は墳丘上にも散っている。142は口径22.0器高47.0胴最大径は中位より若干上に有り45.2cmを測る。底部は尖底気味で肩の張った器形となる。胴部外面は木目直交の平行叩後粗いカキ目調整を施す。内面には同心円の当て具痕が残る。外面肩部には自然釉がかかっている。破片は墳丘上･周溝内にも散布している。143は口径19.5器高39.6cmで胴最大径は中位のやや上方にあり37.0cmを測る。外面は木目直交の平行叩後粗いカキ目調整を施し、内面には同心円当て具痕が残る。底部は平底気味になる。145は平瓶で口径5.4器高17.2胴径19.0cmを測り体部が厚い。体部外面はカキ目調整で底面と2段に回転ケズリを施す。破片の一部は墓道と周溝から出土する。144は坏身で受け部径13.8器高4.3cmで底面と一段に回転ケズリを施す。底面は平担気味になる。146・147は銅地銀張りの銀環で146は外径2.4cm断面径５～６mm、147は外径2.4cm断面径5.5～7mmを測る。145は長三角形・長頸の鉄鏃の3本の銹着で最大長7.8刃幅1.3cmを測る。両丸造である。

Fig. 82　10～12号墳全景（南東から）

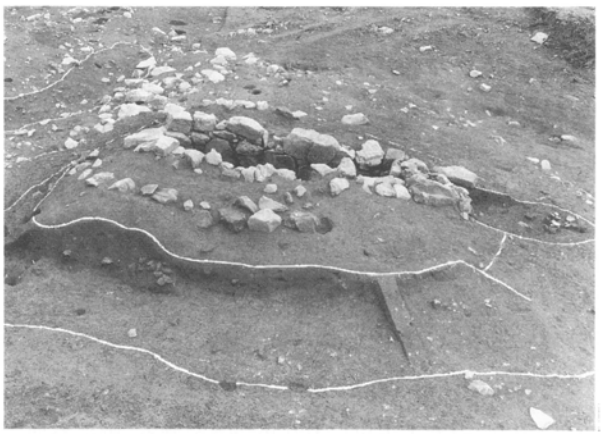


Fig. 83　10号墳検出状況（南西から）

Fig. 84　10号墳検出状況（西から）

10号墳（Fig.82～94）

10号墳は９号墳と同様南東に開口する単室両袖の横穴式石室を主体とする円墳である。

西丘陵の８号墳の西方13ｍ程の陵線先端部付近に位置する。標高25ｍ付近でＣ－４グリッドの位置にありＢ群に属している。

南側のキャンプ場造成時の客土中に完全に埋没しており、現況では若干の高まりが認められた。古墳の存在が予想された事から調査中に試掘を行い存在を確認したものである。

調査は石室内の排土と清掃、墳丘・周溝の検出を行い、トレンチによる墳丘の断ち割りを行った後、丘陵側の古墳整地面までの墳丘盛土の除去を行い掘方を検出するまでに留めた。

墳丘は整地面から20㎝程の高さを残すのみでそのほとんどを戦後の開墾時に削平されている（Fig.83・84）。残存している周溝と墳丘内列石から墳丘規模を復元すると、東西7.5ｍ南北5.5ｍ程の東西に長い楕円形の円墳になる様である。

立地が斜面上であるため石室構築時に平担な作業面を確保するため半径４ｍ程の馬蹄形に30㎝程掘り下げて、この面はそのまま周溝とし、この中央に3.0×7.8ｍ、丘陵側で深さ80㎝の断面逆台形の掘方を掘削し、主体部を構築している。羨道部は７号墳と同様に閉塞部から２段の掘り込みとなり、こ

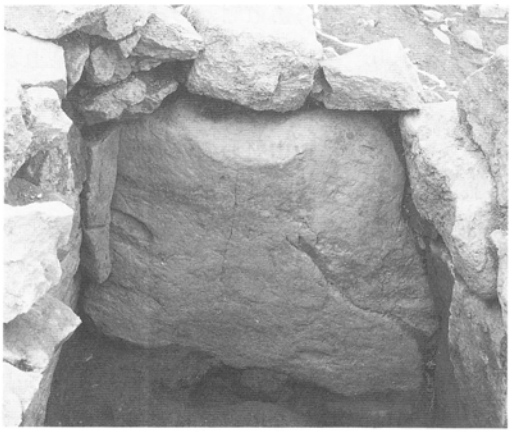


Fig. 85　石室奥壁（南東から）

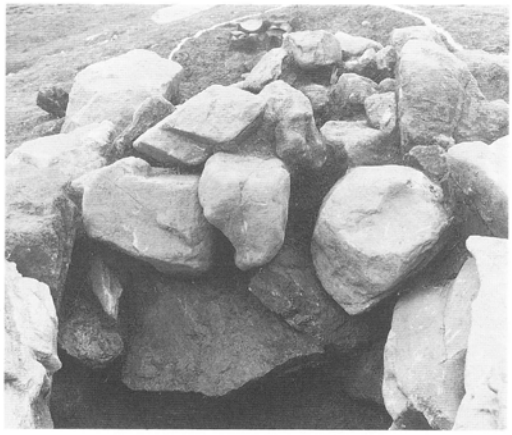


Fig. 86　石室閉塞状況（奥壁から）

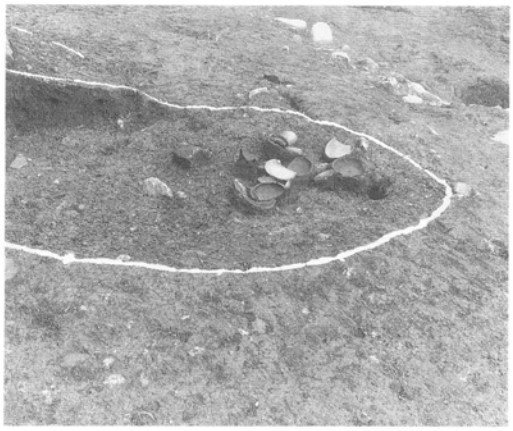


Fig. 87　10号墳墓道遺物出土状況（南西から）

Fig. 88　10号墳墓道出土遺物

Fig. 89　10号墳墳丘内祭祀（南から）

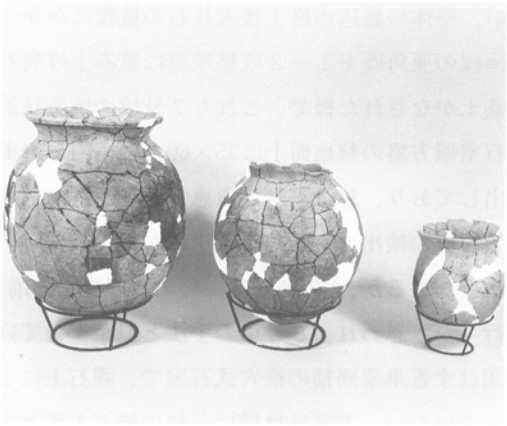


Fig. 90　10号墳墳丘内祭祀遺物

Fig. 91　10号墳墳丘内周溝（南東から）

Fig. 92　10号墳墳丘内周溝（南西から）

の上段部に羨道側壁の続きを構築しており、羨門からの下段の延長が墓道となっている。

周溝は地山整形の面をそのまま用いており丘陵側と奥壁の延長部分までの矩形に近い形で巡っている。墳丘盛土はこの整地面の底面からなされておりこれが周溝の内法面を形成することになる。幅は左側辺が広く1.7mで北に下がる程狭くなる。底面は南西部の丘陵陵線上を最高所に北東側の陵線先端方向へと低くなる。

墓道は羨門幅から若干広がり、端部は流失して不明であるが、羨道の閉塞部から墓道にかけて緩く傾斜している。

墳丘盛土は掘方上面までの壁体裏込めと天井石被覆までの層位が残っており墳丘整形の盛土はほとんど削り取られている様である。壁体の裏込めには地山土の赤褐色土・暗黄灰色シルト・暗褐色シルトが薄くつき固められているが粘土の使用が少なくしまりはゆるい。壁体の裏込め終了後天井石の被覆にかかっているが、この際、玄室部分のみを囲む様に50cm程の亜角礫を１～２段整地面に重み上げ列石をつくり（Fig.84）、この内側から天井石被覆の盛土がなされた様で、これも７号墳の構築技法と共通している。この列石の外側、羨道左側の石室掘方脇の整地面上に35×60cmの楕円形の土壙が有り、内部に土師器３個体が破砕されて検出しており、脇に一対の須恵器蓋杯が供献されている（Fig.89）。７号墳の墳丘内供献の土器群と同様の検出で、天井石架構時か封土被覆時の祭祀跡と思われる。この後、墳丘の整形の盛土が行われるが、この時幅70cm程の内周溝を掘削し（Fig.91・92）、これにかけて墳丘整形の盛土を行ったと思われ、８号墳の手法と似かよっている。主体部は主軸をN－51°30′－Wにとり南東に開口する単室両袖の横穴式石室で、腰石上に１～３石を積む程度が残存する状況で天井部は残っていない。玄室は奥壁に一枚の鏡石を置き（Fig.85）その上に小型の礫を小口に積む。幅1.0mで、玄門側は0.95m、左側壁2.3m右側壁2.4mの長方形プランで右側壁が若干張り出す。玄

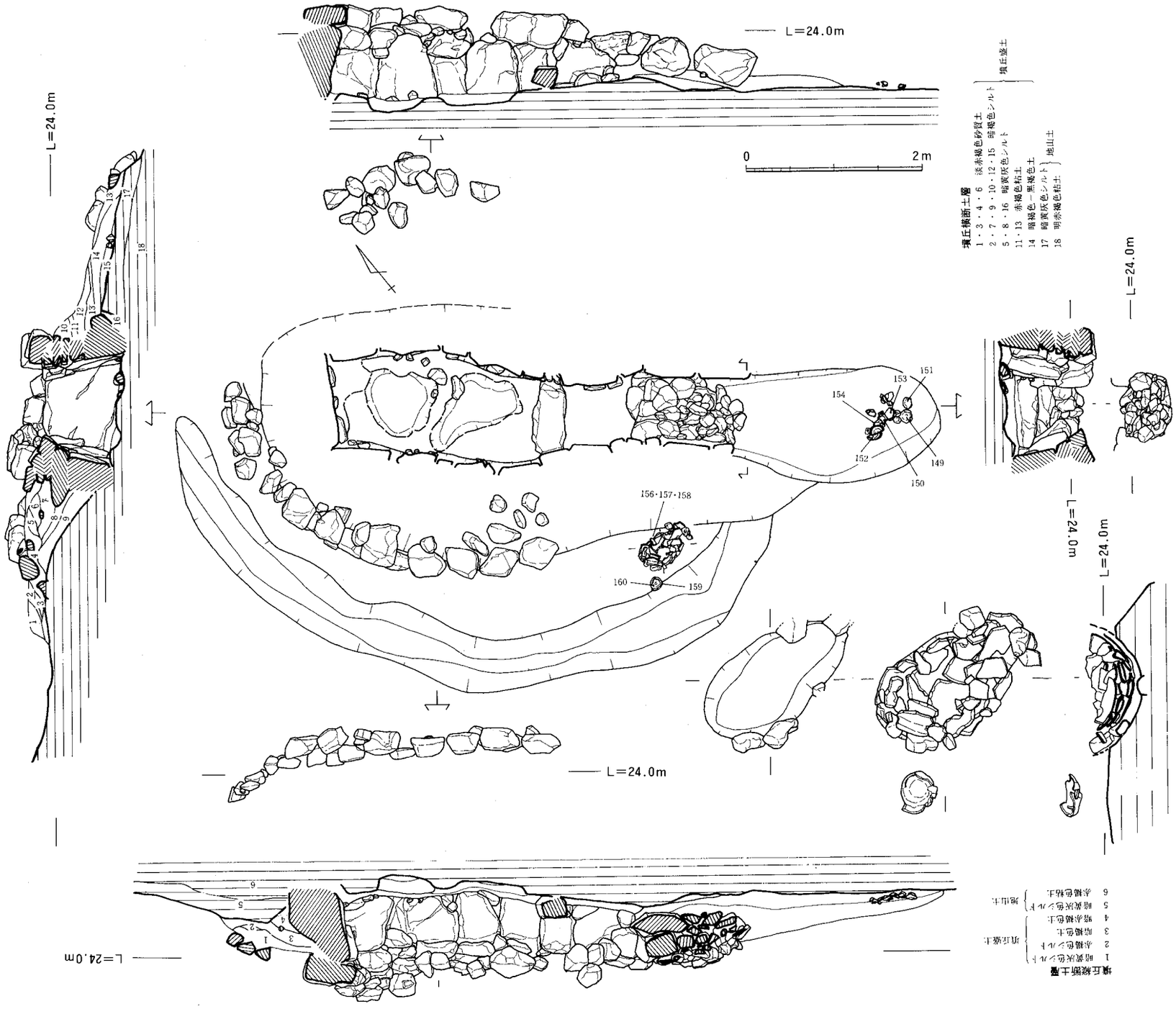


Fig. 93　10号墳実測図（1/20・1/60）

門部は左袖幅が10cm程でこのまま羨道へと連なりしまりのない平面プランを呈している。左側壁は幅50cm高さ50cm程の奥壁腰石より小振りの方形の礫を縦位に4石並べ腰石とし、この上に厚さ20cm程の礫を2～3段持ち送りで積み上げている。袖石は縦長の方形の礫を縦位に置いている。右側壁も同様に4石で構成している。床面上には15cm程の礫で敷石がなされていたと思われるが、撹乱が著しく原位置を保っているものはない。羨道は玄門からの幅をそのまま受け幅0.85m長さ2.4mを測る。側壁は袖石の横に70×50cm程の礫を横位に、これより先は床面から20cm高い掘方の上段に50cm程の小振りの礫を腰石とし、この上に塊石を1～3段積み上げる7号墳の羨道と同じ構築である。玄門部に細長の礫で梱石をもうけ、玄門から1.1mの位置に閉塞がなされる（Fig.86）。閉塞は玄室側に20～50cm程の礫2～3石を前面に2段以上積み上げた様で前方に面をそろえている。この後に15cm前後の小礫を乱雑に積み上げている。全体が羨道床面より20cm程浮いており追葬時の構築と思われる。

遺物の出土状況は、石室内の撹乱土中と床面からガラス小玉3点・土製小玉11点・須恵質紡錘車1点と鉄鏃1点、鉄刀1点、刀子2点、石突1点の小片を検出、羨道から土師器坏片を検出、盗掘の際の取りこぼしが残った様な状況で須恵器は検出されなかった。盗掘のためほとんどの副葬品を欠いていると思われるが残った遺物の構成は6号墳に似ている。墓道からは、羨門から1.5m程の位置で須恵器坏蓋・坏身をそれぞれ5点・瑳・平瓶・土師器高坏・甕の小片を検出（Fig.87）。蓋坏は破損状態で乱れており蓋を被せて安置した様な状況ではない。追葬時にかき出したものの可能性が高い。墳丘では前述した土壙内に廃棄された土師器甕以外には墳丘削平時の掘削面上に遺物が散乱した状態で検出され、土壙近くの羨道部左側の墳丘に多く、須恵器蓋杯・高杯・大甕・土師器甕等を検出している。7号墳同様に左前方の墳丘内に祭祀による土器の集積部分があった様である。周溝からは左前方で須恵器坏・高坏・大甕等の破片が散布した状態で検出しているが、大部分が墳丘上のものと接合するため、この部分からの流出したものが大半を占めている様である。

出土遺物（Fig.94）

149～154・161は墓道、155～160は羨道左側の墳丘内、162は羨道右側の墳丘上面、163は周溝からの出土品である。156～158以外は須恵器である。

149～151は坏蓋で口径13.6器高3.6cmを測る。天井部から1～2段程が回転ヘラケズリで天井部が平担になる。焼成はあまい。150は口径14.0器高4.2cmで外面体部の⅓弱が回転ヘラケズリ。151は口径13.4器高4.3cm。外面の一部に灰がかぶる。152～154・161は坏身で152は受け部径14.6器高4.3cmで外面体部の½～⅔が回転ヘラケズリ。153は受け部径14.6器高4.3cmで体部の½～⅔が回転ヘラケズリ。外面に灰がかぶる。154は受け部径13.0器高3.3cmで蓋受けの立ち上がりが高く、体部は浅い。一部に灰がかぶる。161は受け部径12.0器高3.8cmで体部の⅓弱が回転ヘラケズリ。155は無蓋高坏で口径12.6器高16.7cmを測る。坏部下半の突帯と沈線間にカキ目工具によ

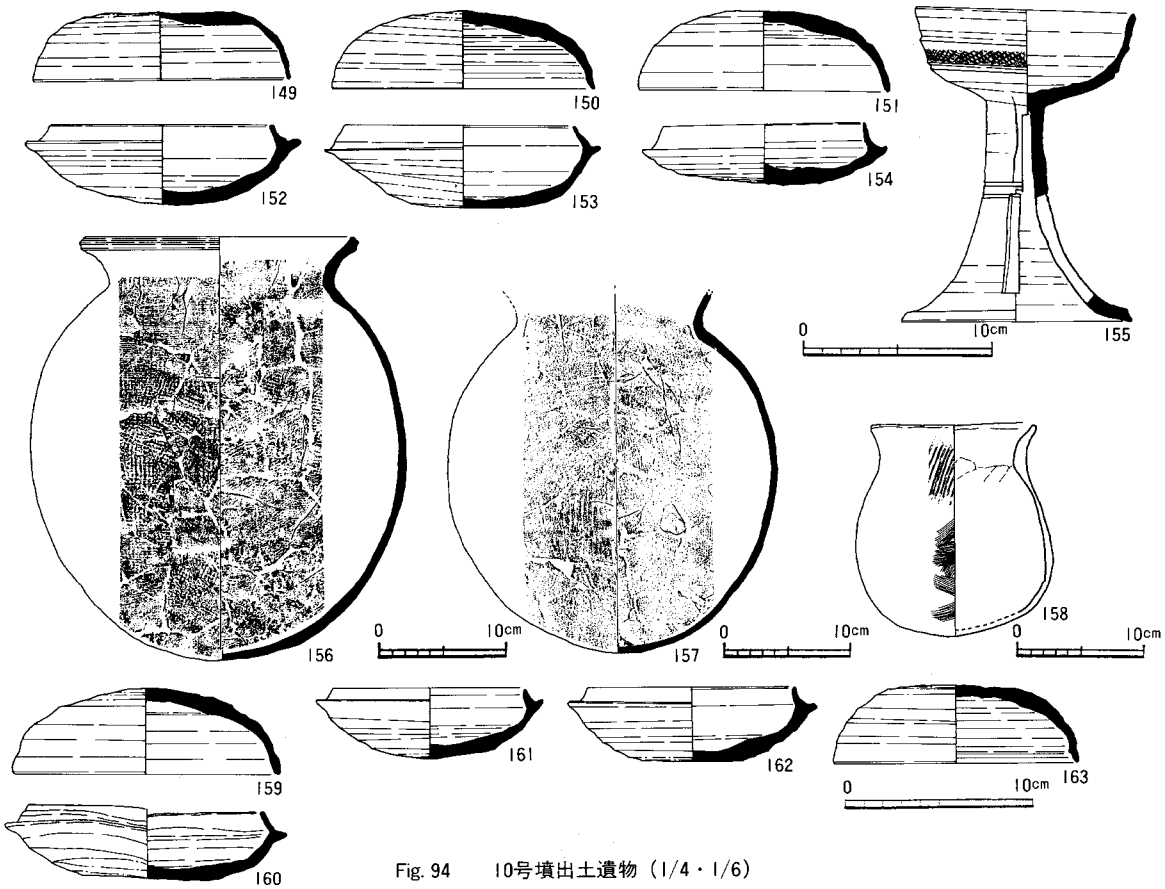


Fig. 94　10号墳出土遺物（1/4・1/6）

る押引き文を施す。脚の下位２ヶ所に長方形の透しをもうけ、この上位に方孔の左側縁をヘラで切り込んだだけで中途で作業を止めている。156～158は土師器の甕で土壙内から破砕状態で検出され、156を下位に、157・158が上位に混在して検出された。156は口唇上面と外面に凹線を施す須恵器甕様の口縁を持つもので口径22.0器高34.0胴最大径29.8cmを測る。胴部外面は木目直交横位のタタキ後上位はカキ目状のヨコハケを施す。内面には平行線当て具痕が残る。色調は淡黄褐色。胎土に砂粒を多く含む。157は口縁を欠くが156と同様の甕と思われ胴最径39.2cmを測る。外面横位、上位で部分的に縦位の木目直交のタタキで一部にヨコナデを施す。158は口径13.6器高16.8cm。口頸部外面は粗いナナメハケで以下は細かなハケ調整、内面頸部以下はケズリ調整。159・160は土壙横の出土で160の下に159が重なっている。159は口径14.2器高4.6cmで天井から½弱に回転ヘラケズリを施す。160は受け部径15.0～13.5cmで大きくひずんでいる。162は坏身で受け部径13.2器高4.0cmで底部が平担気味になる。163は坏蓋で口径13.0器高4.2cm。外面の½程に回転ヘラケズリ。口唇内面に沈線が有る。

Fig. 95　11号墳全景（南東から）

Fig. 96　11号墳墓道土層断面（北西から）

Fig. 97　11号墳石室閉塞状況（北から）

11号墳（Fig.95～105）

11号墳は北西に開口する単室両袖の横穴式石室を主体とする円墳である。

西丘陵の先端近くの丘陵斜面と中位段丘の緩斜面との標高22m程の地形変換線付近に位置し、7号墳の西方14m、10号墳の北方11mのB－3・4グリッドにある。B群に属する。

開墾で墳丘はほとんど削られており現況では若干の高まりが認められる程度であった。古墳の可能性が考えられた事から調査中に試掘を実施、確認したものである。

調査は石室内部の排土と清掃、墳丘、周溝の検出を行い、トレンチによる残丘の断ち割り土層観察後斜面側で掘方上端の検出を行った。

墳丘は著しい削平を受けて平担になっており、丘陵斜面側では黄灰色シルトの基盤層が露出し、掘方の一部が見え、西と北側の墳裾も周溝の内側に大きく段状に削り込まれていた(Fig.95)。残存する周溝から墳丘規模を復元すると東西11.5m南北8mの楕円形か前面が直線の馬蹄形の円墳が想定されるが、羨道右の周溝は外に開き気味であり6号墳に似た後者の可能性が高い。

緩斜面に立地するため南西の丘陵側を半径6m、深さ20cm程の馬蹄形に掘り下げて平担面を作り、この外縁に沿って周溝を、中央部に石室掘方を掘削している。

周溝の掘削は他の古墳に比べて深く

Fig. 98　11号墳石室奥壁（北西から）

Fig. 99　11号墳石室床面（北西から）

Fig. 100　11号墳羨道部（南東から）

Fig. 101　11号墳梱石上面線刻（南東から）

Fig. 102　11号墳左側壁（南西から）

Fig. 103　11号墳石室掘方（南から）

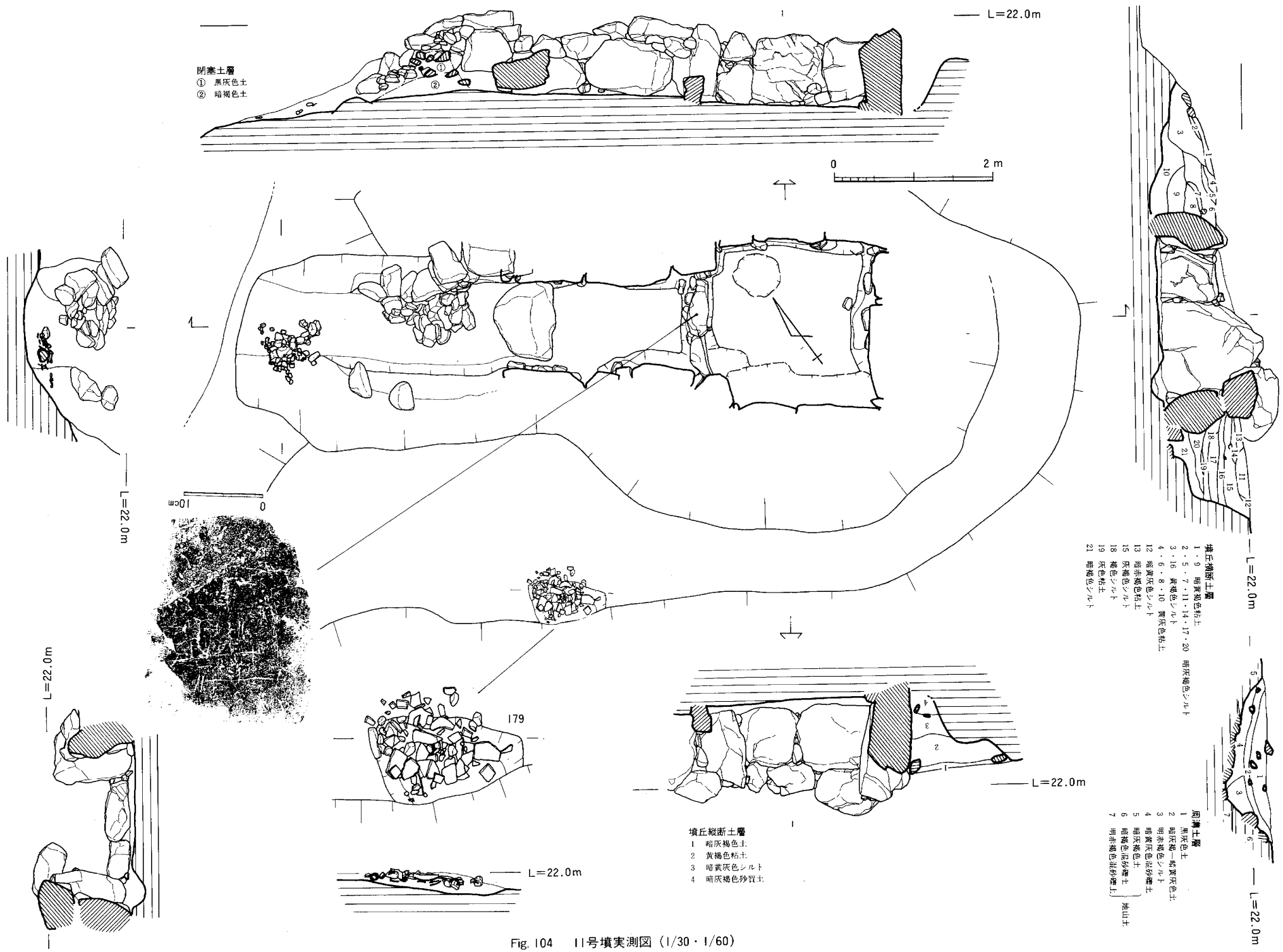


Fig. 104　11号墳実測図（1/30・1/60）

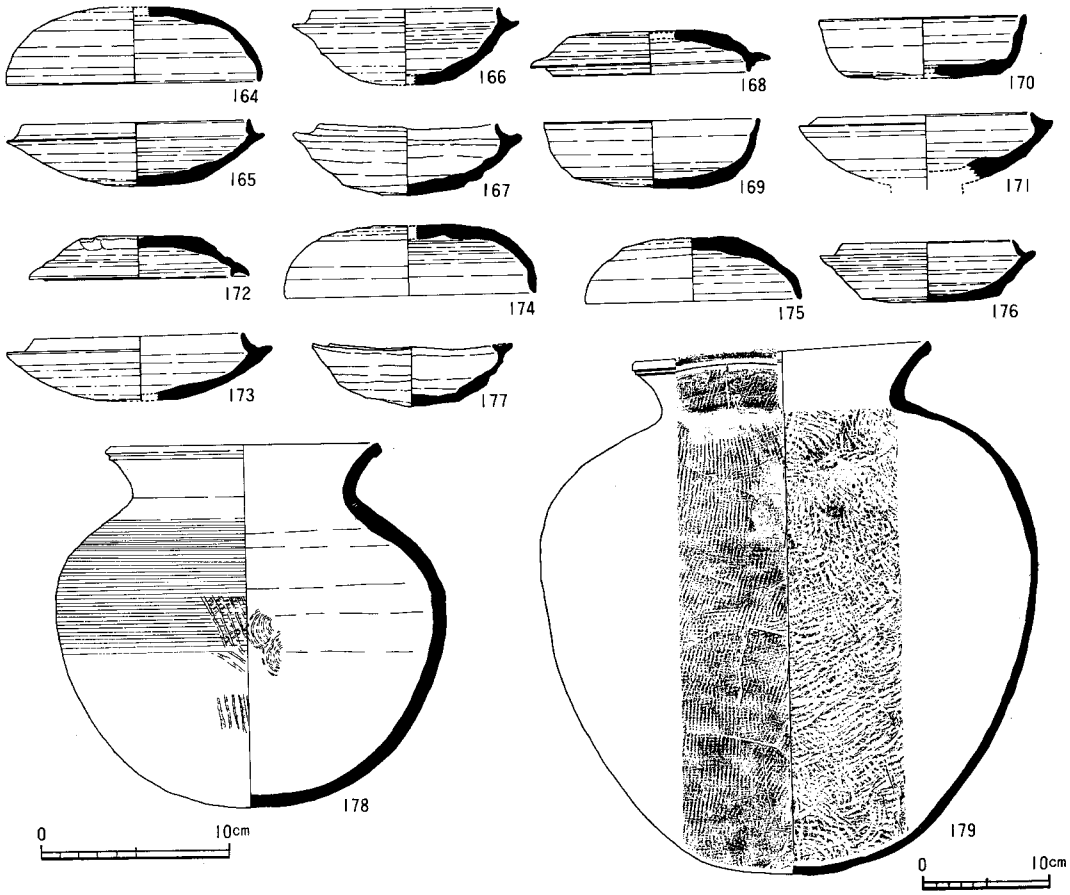


Fig. 105　11号墳出土遺物実測図（1/4・1/6）

基盤層上面から50cm近く有り、下端は外側に寄り、中央側にゆるく立ち上がる。幅は2.6～1.7mである。

掘方は石室主体部に沿った形で墓道とともに掘削されており、トレンチによる断面観察によると玄室部は径5.5m程の円形の掘方内にさらに墓道から延長した幅2.8mの長方形の掘方を掘削している様で（Fig.103）、丘陵側で深さ120cmを測る。羨道部の掘方も2段になっており、7・10号墳と同様に閉塞部から羨門側に側壁を25cm程高い上段部分に構築している。墓道は掘方そのままの幅で、端部は削平され失われているが、羨門部から西へゆるく傾斜している。

墳丘盛土は掘方内の壁体裏込めが残っているのみで暗赤褐色粘土と暗黄灰色・暗褐色シルトの地山土を交互につきかためている。

羨道右側、周溝脇の墳丘内に径1.0m深さ12cmの浅い土壙が有り須恵器大甕が破砕された状況で検出された。復元された土器は完形に近く、大きな削平は受けていない様であるが上面の覆土が削平されており、地山整形後どの段階での供献か確定できない。

主体部は主軸をN－55°－Wにとり、唯一西丘陵の西側の谷に開口するもので、単室両袖の横穴式石室である。状況は腰石上に１石が残る程度で大部分を欠失している。玄室は奥壁に高さ130cmの山形の偏平な礫と75cmの長方形の礫を縦位に２石並べ、幅2.1ｍを測る（Fig.98）。玄門部は幅2.0ｍ、左側壁2.0ｍ・右側壁1.9ｍの方形プランで、左袖幅27cm、右袖幅35cmである。右側壁は２石を横位に置き腰石とし幅50cm程の方形の礫を持ち送り気味に積む。左側壁は３石を腰石とし、袖石脇は２石を縦に積んで高さをそろえている。側壁の腰石上面は奥壁左の腰石に、腰石上の一石の上端は奥壁右の腰石にそろえている。袖石は幅60cm程のものを縦位にすえ、奥壁腰石に高さをそろえ横に目を通している。羨道は幅1.1ｍ・長さ4.5ｍで袖石の横に80～110cm程の礫を２～３石横位に置いて腰石とし、これより先は床面より25cm高い掘方の上段に壁を構築しており、袖石横の腰石上端に目を通している。玄門部には細長い礫で梱石をもうけており、上面に格子目の線刻が有る（Fig.101）。玄門から２ｍの位置に羨道幅で高さ70cm程の偏平な礫が倒れており、これを蓋石として裏に暗褐色土と黒灰色土を置き上面に小礫を置いて閉塞としている（Fig.97）。

遺物は石室撹乱土中より須恵器蓋坏・平瓶・甕・盌・土製小玉21・滑石製臼玉４・管玉１・銀環１・鉄鏃３・刀子１・鉄滓２点を検出した。閉塞・墓道部からは須恵器蓋坏・高坏・甕が小片となって散布している。墳丘上には羨道左側部分を中心に須恵器坏・高坏・甕等を検出しているが周溝内のものと接合するものが有り広く散乱している。

出土遺物（Fig.11）

164～171は石室撹乱土中、172～178は閉塞上面・墓道から179は墳丘内土壙からの出土で、全て須恵器である。164・165は蓋坏で、164は口径13.6器高4.0cm。165は受け部径13.6器高3.4cm、体部外面の½程が回転ヘラケズリで灰をかぶる。166・167は坏身で166は受け部径12.0器高4.0cmで体部の½強が回転ヘラケズリ。167は受け部径12.0～13.0器高4.0cm。168は坏蓋で受け部径12.8器高2.3cmで天井部はヘラケズリ後ナデで平担になる。返りは高目である。169は同時期の坏身で底部ヘラ切り後ナデで広い平担気味の底部となる。171は有蓋高坏の坏部で受け部径13.5cmで立ち上がりの傾斜は大きく短い。172・174・175は坏蓋で172は受け部径11.7器高2.3cmで返りは低い。天井部は手持ちヘラケズリで灰をかぶる。174は口径13.5器高3.8cm。175は口径11.6器高3.5cmで天井部は回転ヘラケズリ後板・指ナデ。173・175・176・177は坏身で173は径14.2器高3.3cmで体部の⅔強が回転ヘラケズリ。176は径11.6器高3.2cmで底部は回転ヘラ切り後ナデで平担になる。177は上下が逆転するとされるものであるが、明確に蓋として出土している状態でなく身とした。径10.6～12.2器高3.2cmで焼けひずみ外面に灰がかぶる。178は小形の甕で口径14.0器高19.4cmで胴外面に木目直交の平行叩後上半はカキ目調整・下半は粗いヨコナデを施す。179は口径24.0器高42.0胴最大径は肩に有り40cmを測る。口縁部外面にタテ条線文を施し、胴部外面は木目直交の平行叩後粗いカキ目・ヨコナデを施す。内面には同心円の当て具痕が残る。

Fig. 106　12号墳石室検出状況（東から）

Fig. 107　12号墳全景（東から）

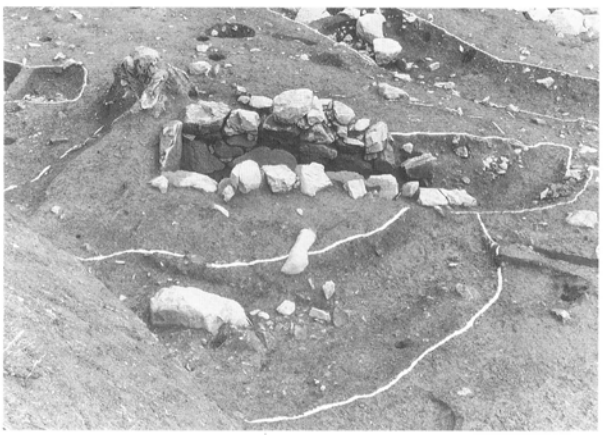


Fig. 108　12号墳全景（南から）

12号墳（Fig.106～114）

12号墳は東に開口する単室片袖の横穴式石室を主体とする円墳である。

西丘陵の西側の谷に面して発達した中位段丘面と丘陵斜面との地形変換線近くの、10号墳の西方８ｍ・11号墳の南方11ｍの標高24ｍ付近に位置する。Ｂ－５グリッドに有りＢ群に属する。

南側のキャンプ場造成時の排土中に完全に埋没しており現況では全く確認不可能で、10号墳と周囲の遺構面検出作業中に検出した。

調査は石室内の排土と清掃、墳丘・周溝の検出、トレンチによる墳丘の断ち割りを行った。

墳丘は他と同様に開墾により平担に削平されており、南側の丘陵方向で地山整形面の暗黄灰色シルトが露出している。西と北の墳裾も大きく削り込まれ段状になっている（Fig.107）。よって南側に残った¼程の周溝から墳丘を復元すると、東西６ｍ・南北５ｍ程の円墳と思われる。

地山整形は南の丘陵斜面を馬蹄形に50cm程掘り下げ平担面を削り出し、周溝・石室掘方の掘削を行っている様である。

周溝は南の斜面側に地山整形の外縁に沿って掘削している様で外法は整形の外縁と一致している。深さは地山整形面から15cm程、幅は2.2ｍで浅いＵ字形を呈している。底面は北にゆるく下がっている。

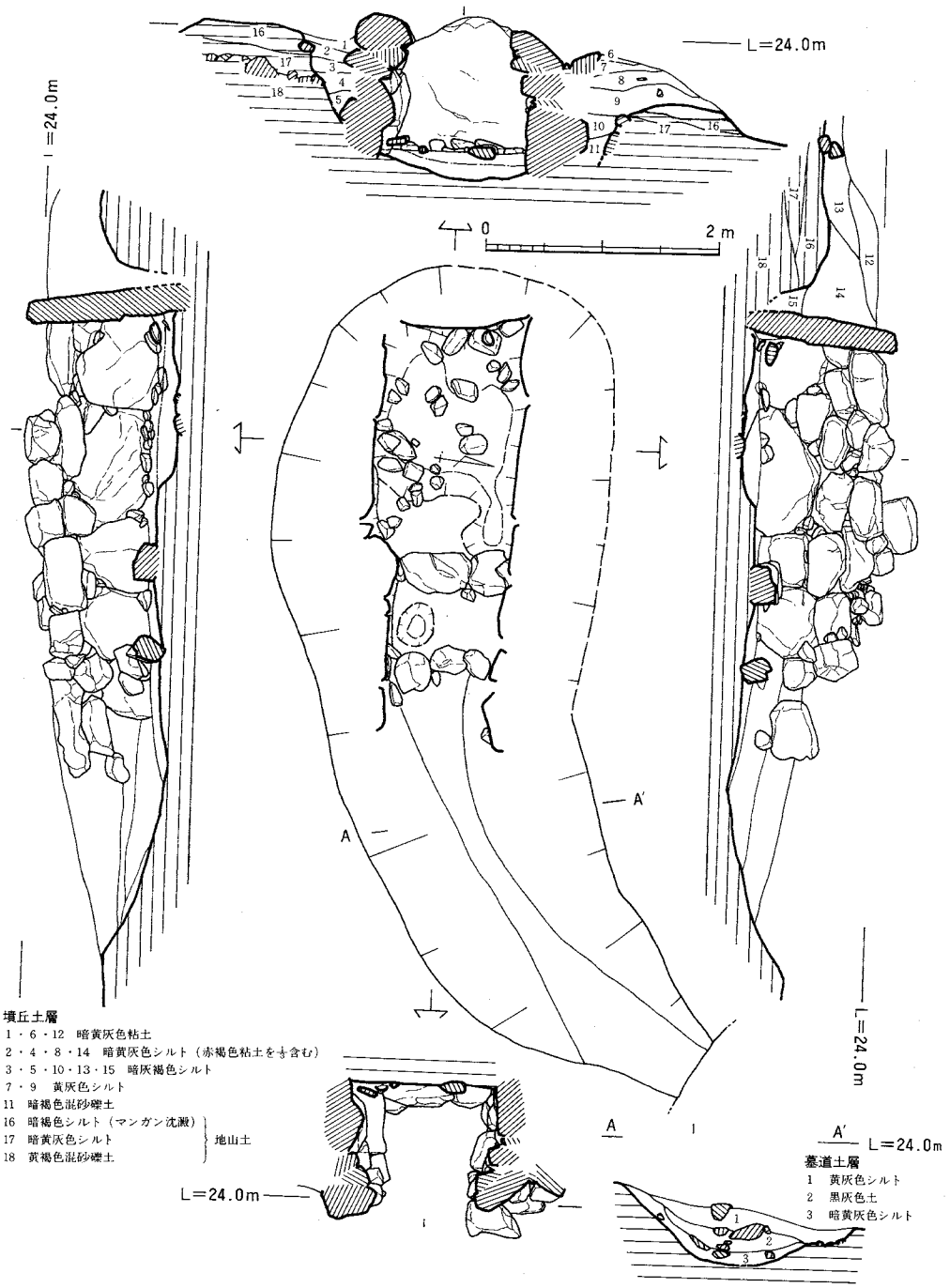


Fig. 109　12号墳実測図

Fig. 110　12号墳墓道土層断面（東から）

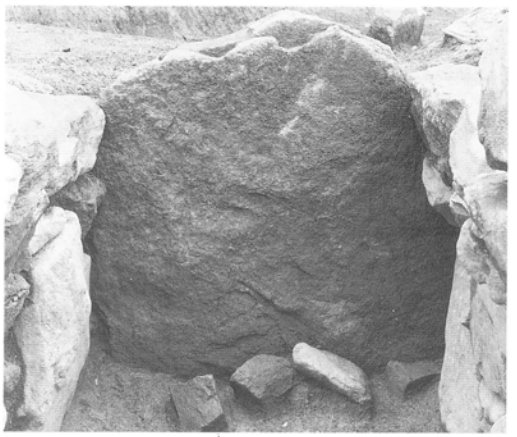


Fig. 111　12号墳石室奥壁（東から）

Fig. 112　12号墳石室全景（東から）

Fig. 113　12号墳石室全景（南から）

石室掘方は奥壁側で幅2.5m、羨門部で幅2.1m長さ4m程で楕円形の掘方に羨道部の幅そのままに墓道部を一体的に掘削しており、墓道は石室の軸線上で掘削すると10号墳の西側の墳裾を削り取る事になり、これを避けるため地形変換線に沿って北に大きく方向を変えている。底面は羨門から北にゆるく傾斜している。羨道部分は7・10・11号墳と同様に閉塞部分から外側は2段に掘削し、この上段に側壁の続きを構築している。深さは丘陵側で110cm谷側で40cmの断面逆台形で谷側にはこの際に排土で整地がなされている様である。

墳丘盛土は掘方内の壁体の裏込めと谷側の整形面からの壁体の裏込めが残っているのみで、天井石被覆時、墳丘整形時の盛土部分は削平されている。谷側の残丘の盛土で高さ50cm程である。盛土には地山土の赤褐色粘土・暗黄灰色～暗褐色シルトが用いられ、シルトと赤褐色粘土との混土とを交互につき固めているが粘土の使用量が少く、全体的にしまりはゆるい。

主体部は主軸をN－82°－Eにとり東側に開口する単室左片袖の横穴式石室で、立地が西の谷

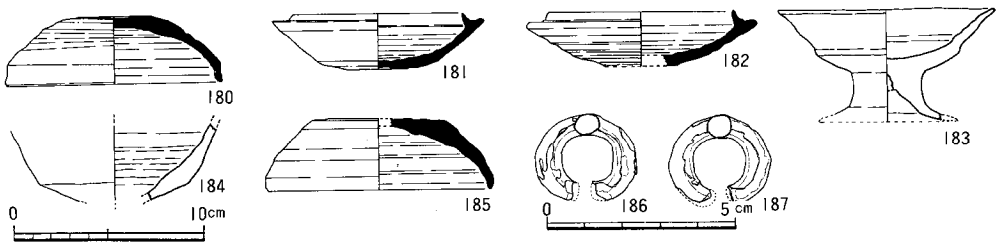


Fig. 114　12号墳遺物実測図（1/2・1/4）

に面した段丘上でありながら東に開口するという不自然な形をとっている。検出時には石室内に1.35×1.0×0.3mの偏平な大石とこれより小振りな２石の天井石とおぼしきものと50cm程の壁体の礫が落とし込まれた状態で、奥壁は鏡石のみ両側壁は腰石上に２～３石残る状態であった（Fig.106）。玄室は奥壁で1.2玄門側で1.2m、左側壁1.9mの長方形プランで、左袖幅は25cmを測る。奥壁は1.2×1.5m×23cmの偏平な一枚岩一石で、左側壁は高さ90cm程の長大な礫を２石横位に置いて腰石とし、この上に幅50cm高さ30cm程の方形の礫を持ち送り気味に積み上げる。袖石も同じ高さの礫を縦位に置く。石室床面には亜角礫で敷石がなされていた様であるが床面に盗掘による大穴が有り原位置を保っていない（Fig.112）。羨道は幅広く0.95mで側壁の腰石は玄室部と同じ高さのものを閉塞部まで用いて、その上に積み上げる礫も玄室側壁から横に目を通してそろえられており、玄室と一体的に構築されている。閉塞部付近から先の側壁は２段の掘方の上段部に50cm程の小振りの礫を腰石に構築しているが大部分は墓道部に流出している。玄門部に30～60cm程の若干大きめの２石で梱石をもうけており、玄門から１mの位置にこれより小振りの３石で仕切っている。梱石としては石の面がそろわず埋設もなされておらず、閉塞石の基底部の可能性が高い。他の閉塞石は盗掘時に墓道にかき出された様で墓道の２層から３層上面にかけ散乱している。

遺物の出土状況は石室撹乱土中より須恵器蓋坏・壺・甕、土師器高坏・蓋坏の破片を検出、一部は墓道のものと接合する。羨道と墓道から各１点の銀環を検出している。

出土遺物（Fig.114）

180～184は石室撹乱土中より出土、185・186は墓道、187は羨道からの出土である。

180～182は須恵器で180は坏蓋。口径11.3器高3.5cmで天井部と２段程が回転ヘラケズリで天井部はナデられ平担になっている。181は坏身で受け部径11.0器高3.0cmで底部の調整は180と同様。182は坏身で径12.2器高2.9cmで小さく平担な底部をもつ。183は土師器高坏で口径11.5器高約６cmで器面は荒れ調整不明。184は器形不明の土師器で外面はヨコナデ、内面は丁寧なヨコナデで底近くはヘラで一段ヨコにヘラケズリが施される。185は須恵器坏蓋で口径12.0器高3.8cmで天井と一段程が回転ヘラケズリで天井が平担となる。186・187は銅地銀環で186は外径26.9×23.5mm、身厚7.4～5.9mmで187は外径26.6×24.5mmで身幅6.8mm。ともに銀箔の半分以上が剥落

している。

竪穴住居址

竪穴住居址は１区、東丘陵の段丘面で２戸検出した。

SC-01（Fig.115－116）

Ｈ－３グリッドに位置し、南北5.1ｍ・東西4.4ｍの方形の竪穴住居址で方位をＮ－14°30′－Ｅにとる。北側の壁から若干離れて70×110cm程の範囲に焼土部分が有り竈と考えられる。この西側に120×90cm程の土壙が、この東側から住居の東壁と南壁の丘陵側に壁溝がめぐる。深さは10cm程で浅い逆台形を呈する。主柱穴は４本で東西の柱間が2.0～2.1ｍ、南北が1.7～1.8ｍで東西が若干長く住居のプランとは逆になる。

遺物は床面近くで検出されるものと住居が半分程埋没した状況で中央に廃棄されたものとが

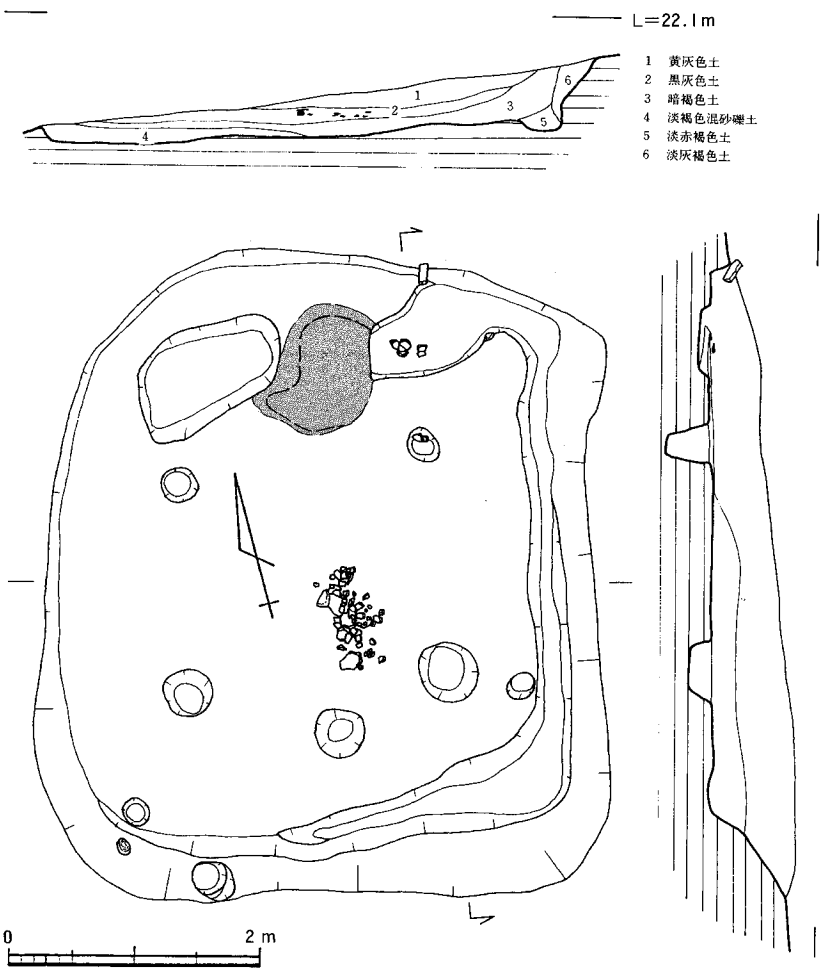


Fig. 115　SC-01実測図（1/60）

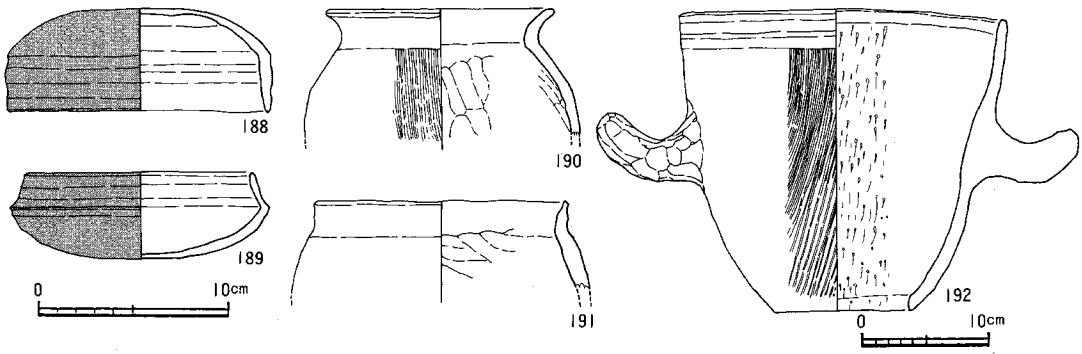


Fig. 116　SC-01遺物実測図（1/4・1/6）

ある（Fig.118）。

188・189は土師器の蓋坏で南西部の壁上から検出。188は口径14.0器高5.4cmで深い器形でヨコナデ調整後外面にはほとんど剝落しているが黒色顔料を塗布、内面天井部はケンマが施される。189は杯身で口径12.2器高4.6cmで立ち上がりは高く内傾する。外面体部は手持ちヘラケズ

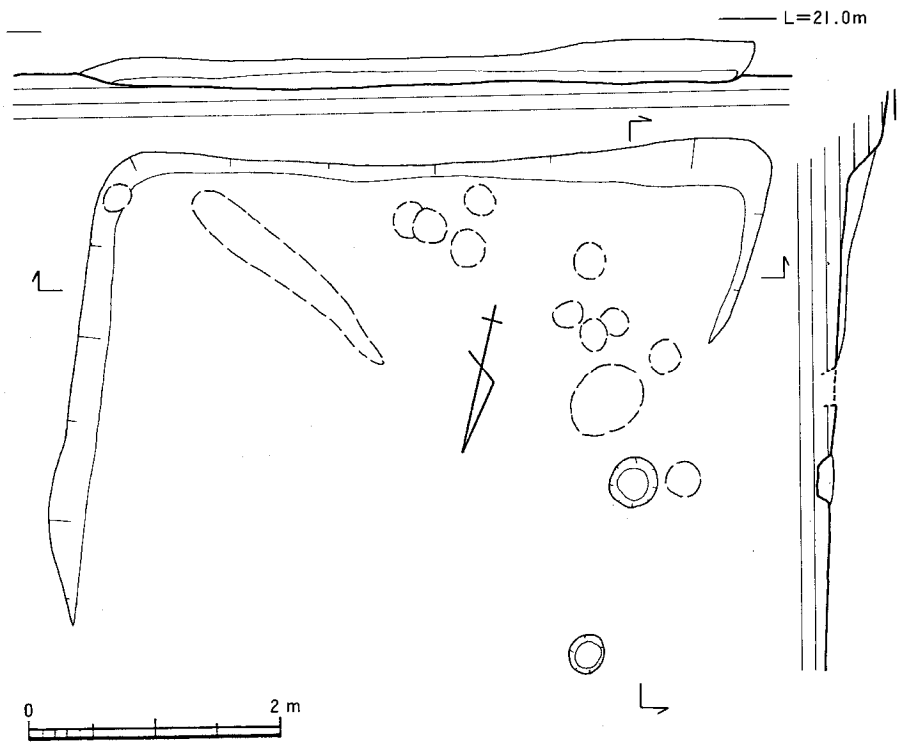


Fig. 117　SC-02実測図（1/60）

リ後丁寧なナデが施され188同様黒色顔料が塗布される。内面は底部を中心にケンマが施される。胎土は精良で淡灰褐色を呈する。ⅢA期の須恵器を模したものと思われる。190・191は土師器甕で190は口径18.0cmで、胴外面はタテハケ、内面はタテ方向のヘラケズリ。191は直口の甕で口径20.0cm。外面は調整不明、内面は胴部にヘラケズリを施す。192は竈東側の溝周辺の出土で土師器甑。口径25.8器高23.9cmで口縁外面に2条凹線気味のヘラナデを施し、以下には粗いタテハケを施す。内面はタテ方向のヘラケズリを施す。他にⅢA期の須恵器坏・碗・甕の破片を検出ししている。

SC-02（Fig.117）

SC－02はH－4グリッドに有り、方位をN－6°30′－Wにとり地形に応じている。東西方向5.3mの方形で丘陵側で深さ35cm、北側は消失している。覆土が暗黄灰色でSC－01と異なっており、住居範囲で同様の柱穴は2つのみで明確でない。遺物の検出はないが、SC－01に先行するものと思われる。

土　壙

土壙は覆土が暗褐～黒灰色で古墳周溝の堆積土と共通するものを5基検出しており、このうち遺物の出土したものはSK－03の1基のみである。分布は2区の段丘上に多く古墳間に分布しており性格は不明のものが多い。

SK－02（Fig.118）はG－8グリッドの地山整形面上で検出したもので西丘陵の東の斜面を標高25m付近で4.5m程の平担面を削り出しており、この面に位置している。80×40cmの隅丸方形の土壙で四周の壁の焼けた土壙である。1度底上げを行って壁を粘土で塗りかえ一回り小さく作りかえている。上位の覆土が古墳上面や周溝の覆土と同様であり古墳時代後期になされた地山整形面上に掘削されたものと考えられる。

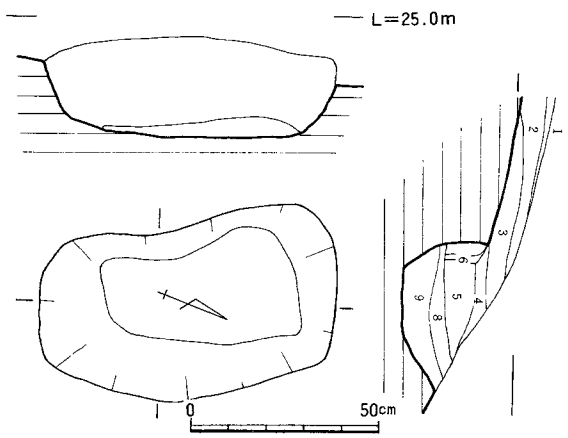


Fig. 118　SK-02実測図（1/20）

1　暗黄灰色土
2　赤褐色土（黄灰色土を少量含む）
3　灰褐色土
4　赤褐色粘土（灰褐色土を含む）
5　灰褐色シルト（炭・焼土粒を少量含む）
6　焼土
7　灰褐～暗黄灰色粘土
8　黒灰色炭灰
9　暗黄灰色粘土（焼土粒・炭灰を寸含む）
10　明赤褐色粘土～地山土

柱穴（付図）

１区の５・６号墳間の広い段丘上と古墳周溝付近で多くの柱穴を検出している。覆土の違いにより４つ程に分けられるが必ずしも時期差を示していない。遺物の出土した柱穴にはグリッド毎にナンバーを付した。

５・６号墳間の平担部には掘立柱建物が想定されるが柱筋の通るものを確認できていない。中に径60cm深さ30cm程の円形で底面に10cm程炭灰が堆積する特異なピットが有り、周壁は焼けていない。Ｈ－６グリッドのＰ－１他がこれに当たる。

他に６・７・８・９号墳の周溝の高位置に径20～30cm程の柱穴が検出される。深さは10～20cm前後で深いものではないが古墳構築時の足場等を想起させる。

４．中・近世の調査

１区の段丘面の柱穴群に該期の建物も想定されるが明確な遺構はない。

遺物は（Fig.119）中世では193の土師質の土鍋が一点で口径24cm。外面はタテハケ後ヨコナデ消しで煤が付着する。口唇と口縁内面はヨコハケ後のヨコナデ消しで指頭圧痕が残る。体部内面は丁寧なナデかケンマが施される。Ｈ－３グリッドの赤褐色流土下の暗褐色土中より出土。14・15世紀頃か。

近世遺物は11号墳石室出土の鉄銭４枚と「寛永通宝」の銅銭１枚と銅製の笄片で、194～196は鉄銭でいずれも銹が著しい。194・196は円銭で194は径24.5mm孔径8.8mmで広縁の輪と内郭が認められる。196は径25mm、孔径７mmで細縁の輪が認められる。195は方銭２枚の銹着で径23mm、細縁の輪と内郭が認められ不明瞭ながら文字の一部が残り「仙」の「山」と思われる。194・195は「寛永通宝」、195・196は「仙台通宝」と思われる。「仙台通宝」は本来は仙台藩内のみの流通銭であるが福岡まで流通した様である。寛永通宝の鉄銭の初鋳は元文４(1739)年、仙台通宝は天明４(1784)年である。よって11号墳は江戸中期には開口しており、博打を行った様で、赤褐色土の埋土下にあり、谷を１ｍ近く埋めている流土はこれ以降の洪水によると思われる。『天保雑記』によると福岡藩内で「天保11(1840)年６月４・５・９日大雨洪水田165・123石損亡……山抜23,261ヶ所・流死80人……」と大規模な山崩れの記載が有り(註)、本調査区の流土はこれに対応する可能性が考えられる。

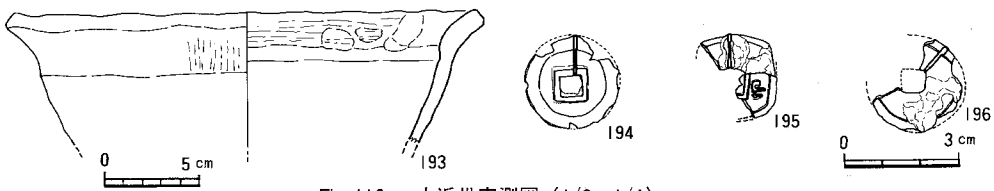


Fig. 119　中近世実測図（1/2・1/4）

Ⅳ 小　結

今回調査した８基の古墳のうち、２基は従来周知されていた草場古墳群１～６号墳中のＡ群に属するもので残りの６基は新たに発見されたＢ支群の全てで、谷をはさんだ東西２つの丘陵に展開する古墳群であることが明らかとなり、第１・２次調査と合わせ全ての古墳に調査の手が入った事になる。丘陵先端側の病院敷地内にも広がっていた可能性も有るが、これでほぼ完結した単位と思われる。

現在三木文雄氏によってＡ群１～４号墳の整理・報告作業が進行中であるが、筆者の怠慢から此等の資料を実見する事もなく今回の報告書作成に至ったためＡ群の検討と古墳群の総括はこれに譲り、Ｂ群を中心に述べる。

石室平面形（Fig.120）は大きく３つに分けられ長方形の竪穴式石室－Ⅰ（５号墳）・横穴式石室で単室両袖で長方形プランのもの－Ⅱa（８号墳）・単室両袖で方形プランをもつ－Ⅱb（６号墳）、同様のプランで長大な羨道をもつもの－Ⅱb′（７・９・11号墳）、単室片袖で長方形プランのもの－Ⅲ（10・12号墳）に類別される。形態の親疎では５－８＜６－７－11＞９となる。

各古墳の出土須恵器の時期は５号墳はⅢＢ期の新相のみ、６号墳はⅢＢ期の新相・Ⅳ期の古相・Ⅴ期、７号墳はⅢＢ期の古相～新相・ⅢＢ期新相、８号墳はⅢＢ期新相・ⅢＢ期新相～Ⅳ期古相、９号墳はⅢＢ期新相～Ⅳ期古相・Ⅳ期古相・Ⅳ期新相・Ⅴ期・Ⅵ期、10号墳はⅢＢ期新相・ⅢＢ期新相～Ⅳ期古相・Ⅳ期新相、11号墳はⅢＢ期新相・Ⅳ期古相・Ⅳ期新相・Ⅴ期、12号墳はⅣ期新相の各期のものが出土している。各時期の須恵器を追葬時の副葬品との前提でみると５号墳は６世紀後半～末の初葬のみ。６号墳は６世紀末の初葬から７世紀中頃まで２回の追葬、７号墳は６世紀後半～末の初葬から末の追葬を一回、８号墳は６世紀末の初葬後７世紀初頭の追葬を一回、９号墳は６世紀末～７世紀初頭の初葬後７世紀の後半までに４回の追葬、10号墳は６世紀末の初葬後７世紀前半までに２回の追葬、11号墳は６世紀後半～末の初葬後７世紀中頃までに３回の追葬、12号墳は７世紀前半の遺物のみの検出であるが、墓道部で須恵器・銀環が検出され追葬の可能性が有る。

以上、初葬の須恵器・石室の平面形・古墳の占地を勘案してＢ群の形成を見ていくと、まず丘陵陵線延長上の中位段丘との地形変換線近くに７号墳が６世紀後半～末に構築され、６世紀末に陵線の山側に10号墳が構築され陵線上を海から山側に古墳が形成される。これに近い時期に西側の地形変換線近くに11号墳が、東側の変換線近くに８号墳が７・10号墳を囲む様に構築され、７号墳はこの時期に追葬がなされる。６世紀末から７世紀初頭頃に７－８号墳の流れで同じ東斜面に９号墳が構築され、８・10号墳では追葬がなされる。以降７世紀前半に９・11号墳で追葬がなされ、次に12号墳が10・11号墳間に構築される。これと平行して10・11号墳で追葬が行われる。７世紀中頃に９・10号墳で追葬され、７世紀後半に９号墳で最後の追葬が行わ

れ、これ以降廃絶している。７・８号墳は７世紀初頭までには廃絶している様である。全体的には東丘陵のＡ群から西丘陵の中央～東斜面、さらに中央から西斜面と、東から西へ移行している様である。

次に著しい盗掘・撹乱を受けているため全容を示しているとは言い難いが出土遺物の特徴を検討してみると、馬具を持たず主な鉄製武器は刀が６・７・10号墳、鏃が６・７・８・９・10・11号墳で、これも長頸鏃がほとんどである。特徴が有るのは鉄鉾・石突で、６・８・10号墳の３基で検出しており、高崎２号墳でも検出されている。(註４) また５号墳出力の有蓋足付壺の蓋は同じく高崎２号墳でセットで出土しており、高崎古墳群との深い関係を類堆させる。他に鉄滓の検出が目立ち、６・７・９号の３基で検出、特に９号墳からは4305ｇと多量に検出されている（Tab. ２）。

註１）　「草場古墳群・斜ヶ浦瓦窯址」1974、早良鉱業株式会社
註２）　1973年、三木文雄担当で調査
註３）　「九州の災害史上巻」1986、三浦幸一郎より引用
註４）　「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集」1970、福岡県教育委員会

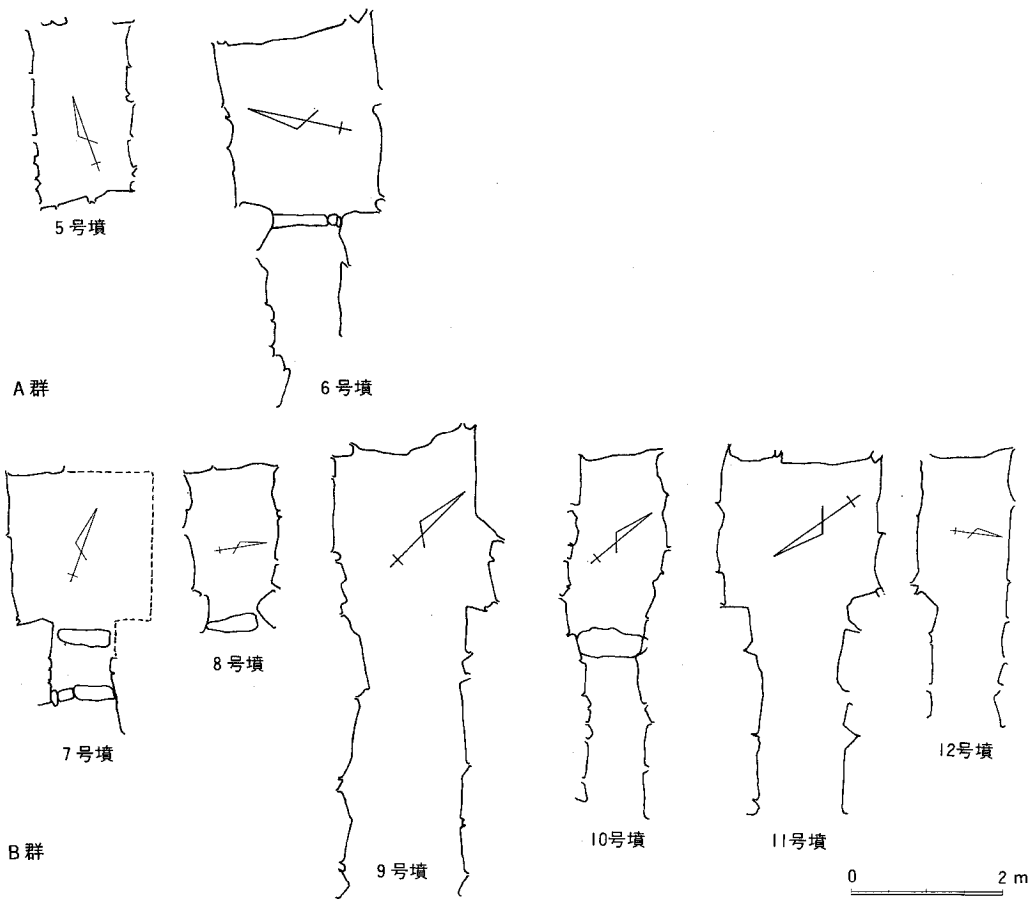


Fig. 120　各古墳石室平面図（1/100）

No.	石室構造	玄室(幅×長)・羨道(幅×長)	開口方位	出土遺物	須恵器時期	墳丘径
5	竪穴式石室	(1.2×2.4)	N－19°30′－E	須恵器蓋坏・𤭯・長頸壺・壺蓋・高坏・甕・土師器甕	ⅢB(新)	方形 7.2×7.5＋α
6	横穴式石室 (単室両袖形)	(2.1×2.55) (0.95×2.6)	N－103°－W	須恵器蓋坏・高坏・提瓶・壺・高坏蓋・𤭯・甕・土師器高坏・甕・鉄刀・刀子・鉄鏃・鉄鉾・石突・鎌・鉄滓・銅飾板・銅鈴・銅環・銀環・金環・土製紡錘車・土製小玉・ガラス小玉・水晶切子玉・瑪瑙勾玉・石錘	ⅢB(新)・Ⅳ・Ⅴ	馬蹄形？ 9.8
7	横穴式石室 (単室両袖形)	(1.8×2.0) (0.8×2.8)	N－160°－E	須恵器蓋坏・𤭯・高坏・壺・甕・提瓶・壺蓋・横瓶・平瓶・土師器高坏・甕・鉄刀・鍔金具・鉄鏃・滑石臼玉	ⅢB(古)～ⅢB(新) ⅢB(新)	馬蹄形 10×12
8	横穴式石室 (単室両袖形)	(1.2×1.65) (0.7×1.4)	N－98°－E	須恵器蓋坏・提瓶・甕・土師器坩坏・鉄石突・鉄鏃	ⅢB(新) ⅢB(新)～Ⅳ	馬蹄形？ 8.5
9	横穴式石室 (単室両袖形)	(1.8×2.4) (1.4×3.9)	N－135°－E	須恵器蓋坏・脚付壺・平瓶・甕・提瓶・高坏・横瓶・𤭯・壺・刀子・鉄鏃・滑石勾玉	ⅢB(新)～Ⅳ Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ	不整楕円形 16×9
10	横穴式石室 (単室左片袖形)	(1.15×2.3) (0.85×2.4)	N－128°30′－E	須恵器蓋坏・高坏・甕・土師器坩・甕・鉄刀・刀子・石突・鉄鏃・須恵質紡錘車・土製小玉・ガラス小玉	ⅢB(新) ⅢB(新)～Ⅳ Ⅳ	楕円形 7.5×5.5
11	横穴式石室 (単室両袖形)	(2.1×2.0) (1.1×4.5)	N－55°－W	須恵器蓋坏・平瓶・盌・甕・長頸壺・土師器高坏・甕・土製小玉・滑石臼玉・管玉・銀環・刀子・鉄鏃	ⅢB(新) Ⅳ・Ⅴ	馬蹄形 8×11.5
12	横穴式石室 (単室左片袖形)	(1.2×1.9) (0.95×1.65)	N－82°－E	須恵器蓋坏・壺・甕・土師器蓋坏・高坏・銀環	Ⅳ	不整円形 5×6

Tab. 1　第3次調査各古墳一覧

No.	出土部位	個数	重量(g)
6	石室床面間	2	13
7	羨道	1	40
	左前方周溝	2	77
	計	3	117
9	石室撹乱土	5	435
	羨道	11	670
	墓道	21	3200
	計	37	4305
	総　計	42	4435

Tab. 2　各古墳出土鉄滓一覧

No.	種別	法量 (径×厚mm)	色調	No.	種別	法量 (径×厚mm)	色調
46	土製紡錘車	85～90×26		66	土製小玉	6×4.5	黒
47	銅地銀環	32～28×7		67	土製小玉	7×5.5	黒
48	銅地金環	25～22×4		68	土製小玉	6×4	黒
49	銅　環	26～28×5		69	土製小玉	6×4	黒
50	銅　環	23～25×7		70	土製小玉	6.5×4	黒
51	土製小玉	7×4	黒	71	ガラス小玉	12×8	緑
52	土製小玉	8×5	黒	72	ガラス小玉	13×4	緑
53	土製小玉	7×5	黒	73	ガラス小玉	14×9	緑
54	土製小玉	6.5×4	黒	74	ガラス小玉	14×10	緑
55	土製小玉	7×4	黒	75	ガラス小玉	17×5.5	茶
56	土製小玉	7.1×6.2	黒	76	土製小玉	11×8	黒
57	土製小玉	7.3×4.8	黒	77	ガラス小玉	15×11	緑
58	土製小玉	7.2×4.2	黒	78	ガラス小玉	14×10	緑
59	土製小玉	6.3×3.7	黒	79	ガラス小玉	12×8	緑
60	土製小玉	6.7×3.5	黒	80	ガラス小玉	12×8	緑
61	土製小玉	7×6	黒	81	ガラス小玉	13×10	緑
62	土製小玉	7×5	黒	82	ガラス小玉	14×10	緑
63	土製小玉	6×4.5	黒	83	ガラス小玉	14×9	緑
64	土製小玉	6×4	黒	84	水晶切子玉	36×19	
65	土製小玉	7×3.5	黒	85	瑪瑙勾玉	38×12	淡褐

Tab. 3　6号墳石室出土玉類一覧

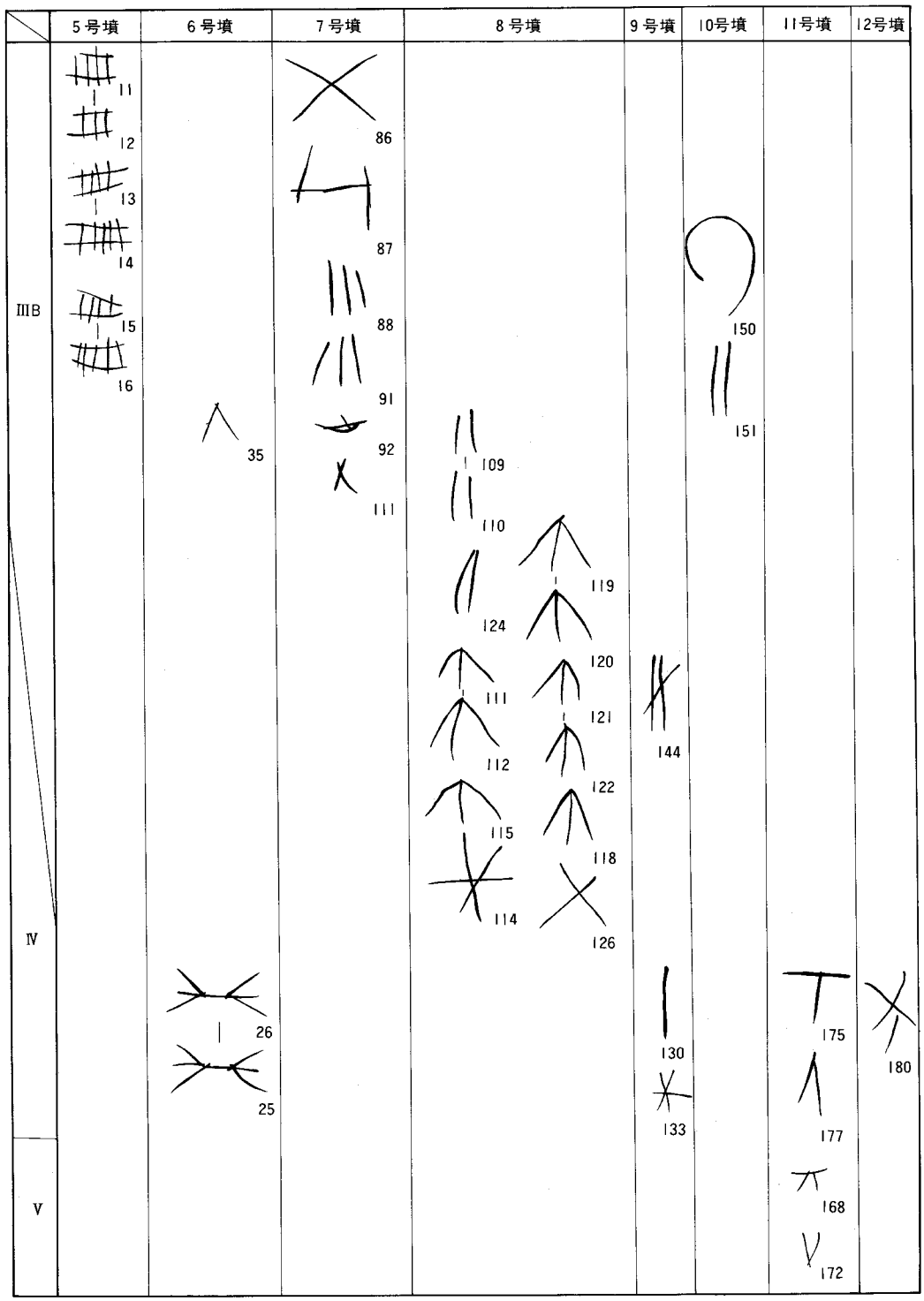


Fig. 121　各古墳出土須恵器ヘラ記号（1/6）

草 場 古 墳 群

—第３次調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第301集

1992年（平成４年）３月13日

発　行　　福 岡 市 教 育 委 員 会
　　福岡市中央区天神1-8-1

印　刷　　大 野 印 刷 株 式 会 社